



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレスにおける本質(τὸ τί ἦν εἶναι)の非因果論的解釈 : その使用の文脈と言語分析を手掛かりに
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学部紀要, 47(4), 1-52
Issue Date	1999-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33737
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(4)_PL1-52.pdf



アリストテレスにおける本質 ($\tau\acute{o} \tau\acute{i} \eta\nu \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$) の 非因果論的解釈

— その使用の文脈と言語分析を手掛りに —

千 葉 恵

はじめに

アリストテレスの形而上学的思索の中心に「存在とは何か、つまり実体とは何か?」(1028b4)という問いのもとに、「第一の存在, 端的な存在」(1028a30f)をめぐる実体論がある。そして実体論は本質論に集中している。本質が第一の実体であることは、いかなる仕方ですうであるのかを問わないかぎり、周知のことと言える⁽¹⁾。アリストテレスの本質主義は、誤解を蒙りながらも、ひとつの実在論の形態として伝承されている。従来、本質は形相と同定されることから、彼の哲学体系のなかで本質がどこに位置づけられるかに関しては、例えば、事物・事象Xの存在の根拠、一性の根拠としてその因果的役割があるという仕方でも論じられてきた。そのような特徴を持つとされる本質を表現する語句はいくつかある。「本質」は「[Xで] あることは何であったか」ということ $\tau\acute{o} \tau\acute{i} \eta\nu \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ X (以後本質と表記), 「Xであること $\tau\acute{o} X \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ 」, 「何であるか $\tau\acute{o} \tau\acute{i} \epsilon\sigma\tau\acute{\iota}$ 」, 「ウーシア」等で表現されている⁽²⁾。本質はアンチステネスに類似の表現があることは指摘されているが、先行哲学者たちにその成句は存在せず、アリストテレスまたは彼の共同研究者の造語であろう⁽³⁾。しかし、これが術語であるならば、アリストテレスの意図として、それが使用される文脈を一義的に特定できるはずである。彼の哲学体系から見れば、他の上記の表現とともに「本質」と訳されうるものを表現するにし

でも、なぜ本質はそういう言語形式を採っているのかについて、そして、そこにおいて本質を意味する他の表現がではなく本質が語られる文脈を確定するという意味での本質の意味の一義性に関しては、研究者のあいだで共有の見解が成立し、明らかにされているとは言い難い⁽⁴⁾。

私は本稿において、かつて Bonitz により「アリストテレス哲学の心」と呼ばれ、最近の『トピカ』の注解書において「アリストテレス研究において最も難しくまた最も争そわれた論点に属する」と形容されている、“τὸ τί ἦν εἶναι”「[X で] あることは何であったかということ」という表現の使用の文脈と意味そして言語構造の解明を試みる⁽⁵⁾。本質は議論の方法の体系化である弁証術の実践の道具として作られた、「定義的」と言われる四つの所謂プレディカビリヤの一つによって指示されるひとつの存在様式である。プレディカビリヤはソクラテスによる「何であるか？」の帰納的な問答による探究の応答を分類したものであり、その一つである本質を意味表示する固有定義はソクラテスが問答の現場で事例による応答に対して満足せず、何であれ X それ自体を問い直す、そのさいの応答の表現であることを明らかにしたい。

まずソクラテスの弁証術の特徴と限界を報告しているテキスト、そして本質が導入されているテキストを検討し、アリストテレスの弁証術の特徴と弁証術における本質の位置づけ、役割を明らかにしたい。その理解の下に、本質という表現の言語構造の分析を試みる。この試みは主に『トピカ』の分析として遂行されるが、その言語上の意味とそれが用いられる文脈について、本質という成句が語られるすべての箇所で一貫して対応できる一つの理解を提案したい。本質は、現実世界への参照により新たな情報を得ることとなしに、アカデメイアにおける現用言語の規範性に則りロギコース（一般言論上・形式言論上）に論じられるものであることを明らかにしたい。また、『形而上学』における本質についての論述を『トピカ』の延長線上にあるものとしてとらえ、弁証術と形而上学に通底するロギコースという言葉論の力による探究は、本質について「まさにそれ [X] であるところのもの」というトートロジカルな仕方存在主張を導くものであることを示したい⁽⁶⁾。そこから、本質はそれ自身としては非因果論的な概念であることと、それがいかに『分

析論後書』や『形而上学』における因果論的説明に組み込まれうるかを示唆したい。哲学の予備学としての弁証術へのこの取り組みは、「本質」という哲学の中心概念の一つがどのような inception を持っているかについての文献的研究となろう。

1

アリストテレスの『トピカ』において展開される弁証術は、説得を事とする弁論術や議論の勝利を事とする争論術さらには妥当な推論を事とする論理学等周辺の言論をめぐる諸術を一部包摂しながらも、独自の課題を担っている。それは端的に言って、問い手と答え手（命題定立者）のあいだの問答において、定立命題の確立と覆えしをめぐるトポス（論点）を確立することにより、問答が適切になされているかを形式のレベルで吟味する方法を与えることである。(172a35f) 弁証術的議論は「或る限られた類の事柄にかかわるのではない」(172a12)が、それはどんな専門知識であれ、言葉により構築されているものである以上、その固有な原理が定める次元とは異なる、言論一般ないし、普遍的言明に還元可能な次元を持ち、そこで命題の吟味検証をなすからである⁽⁷⁾。(172a28, cf.171b3ff)そしてそこで対話者のあいだで同意なり反駁が可能となるためには、専門的な主張の真理性は直ちには確かめ共有のものとはなしえないので、「提出されたいかなる主題についても、可能なかぎり通念であるものに基づき推論する或る能力を見い出すこと」が不可欠となる。(183a37f, cf.100a29ff)「通念」とは「すべての人または大多数の人ないし知者にそうであると思われる事柄」である。(100b21f)

通念に基づく弁証術の実践は幾つかの果実を生む。ひとつはプロとコントラの議論を提出する対話や議論の「訓練」に対して「有用」である⁽⁸⁾。というのも「方法を持っていれば、容易に提出された問題について議論できる」からである。(101a27ff, 164a12ff) 他方、弁証術は「[個別科学をも含む] 哲学に則した諸学問」⁽⁹⁾に対して「有用」であるとされる。というのも、提出された問題の「両面に対しアポリアを提示することができるなら、各々において

われわれは真と偽を容易に見て取るであろう」からである。(101a26ff, 162a15f, 155b0ff) なお、個々の学問の「第一原理」に対しても有用であると言われる。というのも第一原理「そのものについて当面の学の固有原理に基づき語ることはできず、それぞれのものについての通念を通じて原理自身について議論することは必然」だからである。(101a36ff) かくして、弁証術は「批判的であることによって、あらゆる理論的方法の原理に対する道を持つ」つまり第一哲学に通じると言われる。(101b3f)

これらの弁証術がもたらす成果は弁証術と哲学の連続と不連続を明らかにしている。弁証術は、通念に基づき議論の方法そして規則を形成し、命題の批判吟味に徹する点において、独自の存在理由を持った自律的な術である。弁証術が論証科学や哲学に対して、そしてそれ故に自然本性が持つ因果論的構造において成立する必然的知識に対して、基本的には真理の観点に対するドクサ（臆見）の観点という仕方に対比されていることは、双方の次元の相違を際立たせている。(105b30f, cf.72a7ff, 100a27ff, 162a15f, 162b31-33, 141a29) しかし、その自律的な営みが、結果として、知識をもたらす個別科学や第一哲学の実践に貢献できるとされる。この連続性はいかに理解すべきであろうか。

彼は『形而上学』において弁証術と哲学の関係について次のように述べている。「弁証家は存在がそれらすべてに共通する、あらゆるものについて議論するが、彼等はそれらが哲学に固有なものであることの故に、それらについて議論していることは明らかである。というのも、ソフィストの術と弁証術は哲学と同じ類に関わるが、哲学は弁証術とは能力の方向において異なり、ソフィストの術とは生の選択意志において異なる。弁証術は哲学がそれについて認識的であるものに関して、検証吟味的（πειραστική）である」。(100a b18-26) ここでは、哲学と対比される、「検証吟味の術」は学問と異なり「たとえひとが、何ら知識を持っていない場合でも、持ちうるもの」である。(172 a21-23) それ故、弁証術は存在である限りの存在について知恵と呼ばれる認識を獲得する哲学・形而上学と区別される。世界の存在様式にコミットせず、言論の次元で吟味する検証吟味は弁証術の中心的な仕事であり、その存在理

由でもある。

他方、他の箇所で「検証吟味の術」は「弁証術の部分」(169b25) であると限定を受けていることは弁証術と哲学の連続という観点から分析すれば、弁証術の他の部分ないし、別の記述の下にある弁証術は学が持つ知識体系の構築に「有用」でありえることを示唆している。弁証術は、単に競技的、論駁的な知的訓練に向かうのではなく、言論様式の分析を通じて世界の存在様式つまり言明の「真偽を観て取る」ことに向かうという目的のもとに実践される時、「哲学に則した諸学」にとって「有用」なものとなる可能性を持つ。私は弁証術が自律的に持つ可能性は、「能力の方向」において哲学的実践にも向かいうると思える。しかし、その時はもはやその実践は吟味検証的なものとしての弁証術とは呼ばれるべきではないであろう。哲学の予備作業として有用なものでありうる言論次元における実践は、私には弁証術の成果を取り入れその延長線上にある、或るいはより適切には弁証術よりもより根底的な仕方では言論を取り扱う「ロギコース (一般 (形式) 言論上)」という手法であると思える。つまり弁証術と哲学の実践に通底している言論様式を彼はロギコースという手法に託したと解する。哲学的認識に向かうこの手法については、8 節以降に論じる。

プラトンの弁証術との関係は興味深い問いであるが、それは類似と不類似の関係にあると言えよう。一方、プラトンにおいては総合と分割による弁証術は最も高貴な知的活動であり、實在の普遍的な学問にふさわしいとされている。(Resp., 531d-534e, 537c, cf. Phileb., 55d-59d, Sophi., 253d, 266b-c)⁽¹⁰⁾ このことはアカデメイアにおける弁証術の「二つの全く異なった様式」⁽¹¹⁾とも理解されよう。学問や術を、それぞれが持つ対象や領域そして方法により区別するアリストテレスの分節的思考は、彼の生来の分析的資質によると同時に、プラトンの存在の普遍学の構想への批判でもあると言えよう。他方、その方法である分割法による定義の試みはアリストテレスの弁証術に継承されている。定義等命題構築による認識付与が弁証術の一つの課題である以上 (eg. 139b14, 159b7f), 弁証術は単に攻撃的、反駁的なものであるとは言えない。この点においてプラトンとの連続性を見ることができる。『トピカ』

がアカデメイアにおける問答実践の体系化であり、術語と方法はほとんどすべてそこで用いられていたと解するか、それともアリストテレスの独自なものであると解するかは意見の分かれるところである⁽¹²⁾。しかし一般的にはソクラテス、プラトンからアリストテレスは弁証術を批判的に継承展開したと言えるであろう。(cf.120b11ff)この問題を本質の術語化との関連で、より具体的に検討しよう。

2

アリストテレスがソクラテスの弁証術の特徴と限界に言及している箇所は、歴史的にはアリストテレスの弁証術が、ソクラテスの哲学実践の方法と言える問答による探究の延長線上にあり、その方法化ないし規則化であることを示唆している。

ソクラテスは倫理的徳をめぐる事柄に従事しそしてそれらについて普遍的に定義することを初めて求めた。・・彼が何であるかを探究したことには道理がある。というのも、彼は推論することを求めたが、何であるかが推論の原理だからである。即ちその当時弁証術はまだ、何であるかなしに (*χωρίς τοῦ τί ἐστίν*)、対立するものを考察することができるほど、またはたして対立するものに同じ知識があるかどうかを考察できるほど、強力なものではなかったからである。ひとは二つのこと、帰納的な議論と普遍的に定義することを正当にソクラテスに帰すことができる。それらは双方とも知識の原理に関わるものである。(1078b17-30)

この報告に見られる「強力なものではなかった」ソクラテスの弁証術はどのようにアリストテレスに継承され強力なものとしたのであろうか。その解明に本質の術語化の文脈を見い出すことができるように思われる。ソクラテスにとって問答の術とは事例を吟味しながら帰納的に何であるかの定義を企て、同意を獲得するという仕方での知の探究のことであった。そしてその定義された何であるかを基に、対立する主張をめぐり問答による推論を試み、

一つの主張を導出することであった。例えば、徳が何であるかを知らなければ、徳が教授可能であるか否かを吟味することはできないとされる。また正義が何であるかを知らなければ、それを持つ者が幸福か否かを知ることはできないとされる。(Meno, 86d, Resp., 354c, cf. Meno.71b)

アリストテレスにおいて「対立するものについて同じ知識がある」という命題を吟味するトポスは、種の次元で、事物(種)に対する属性(同じ知識)の帰属関係が全称肯定か全称否定かを見ることである。(109b13ff)そこでは、対立するものの種ごとに、例えば相関的なもの、反対なもの、欠如や所有の点で対立するもの、矛盾するものという仕方、それらの種ごとに同じ知識があるかを調べればよく、個々の無数のものを調べる必要はない。ただし、種の次元で明らかでない場合にこれらを不可分割的な個物に至るまで分割すべきであるとされる。(109b20f) また、対立に関する随伴関係のトポスも提示されている。「対立は四つあるから、[命題を] 確立するさいにも覆えすさいにも、[主語と述語の] 随伴という視点から矛盾[対立]を検討すべきであるが、帰納に基づき把握すべきである」。(113b15-17)例えば、「反対」(113b27)のケースである勇氣と卑怯に関して、勇氣には徳が随伴し、卑怯には悪徳が随伴する。そして各々に対する他の随伴(eg. 望ましいものと避くべきもの)も平行的である。(113b27ff) その際、確立と覆えしに「有用である限り、帰納に基づき」(113b29)反対なものの随伴関係を探索すべきである。このように対立関係の枚挙そして、種の次元での善や悪、健康や病気などのサンプルの探索は、基本的にはソクラテスの帰納法の継承であるが、その手続きがトポス化されている、つまり検討すべき論点が整理され体系化されていると言えよう。この他にも、対立するものについて論じる様々なトポスが提出されている。(eg.112a16ff, 147a29ff, 153a26ff, 155b29ff)

定義は「何であるか?」という定型句で問われるソクラテスの探究の目標であると言ってよい。ソクラテスは敬虔や思慮節制等の徳が何であるかを問答による吟味という仕方、で探究した。彼にとってはその何であるかを知ることとはその徳を身につけるそのような力あるものであった。対話相手の定義の形成に表われる倫理的な理解そのものが、その人の人格の片寄りを示すこと

になり、人格の形成と離れていない本質の探究は常に途上に止まる運命にある。アリストテレスのソクラテスへの一つの批判は彼が倫理的な問題のみを扱い、「自然の全体」(987b2, cf.642a27ff)を対象にせず、「何であるか?」の探究の対象領域が限定されたことにある。そして、数学を範型にした論証理論に基づくより確実な知識論を持つ立場から、倫理的な事柄に知識の範型を求めることの不適切さの感も背後にあると思われる。何よりも、たえず袋小路に陥るソクラテスの探究は ad hoc なものであり、問答の方法論が確立されていないという点に不満があったと考えられる。

他方、アリストテレスはソクラテスの時代に「本質すなわち実体を定義することが展開された」(642a26, a28f)と他の箇所で言及しているように、彼の定義形成の試みの仕方は、それまでの自然学者が事物は何からできているかという構成要素の探究に専心したものとは異なるものであり、自覚的に「初めて」何であるかの定義を求めたことを定義形成の特徴として評価している。(988b24ff, cf.642a21ff, 987b1ff, 984a20, 993a11ff)そしてプラトンはこの仕方で定義することをソクラテスから「受け継ぎ」(987b4),「誰も明瞭に本質すなわち実体を説明したひとはいないが、アイデアを立てた人々は[そのなかでは]最もそれを語っている」(988a34-b1)と二人の連続性が確認されている。

ソクラテスの問答実践の纏めとして、帰納と普遍的定義がソクラテスの貢献であるとされる。『トピカ』においてこれら二つは継承され、実践されている。「帰納」が弁証術的推論の二つの基本的な方法の一つとされ、それはもう一方の演繹推論よりも「一層説得的で、明瞭であり、そして感覚に即してより可知的であり、また多くの人々に共通である」と特徴づけられる。(105a16-18)⁽¹³⁾ また帰納は可知的な個物を収集し、普遍をより可知的なものとする仕事をなす。(156a4f)そして「うまく推論する者はより通念であるものかつより可知的なものに基づき問題とされたものを論証する」(159b8f)と言われており、帰納は弁証術的推論の形成のさいその前提を通念とし、より可知的なものとするにおいて貢献する。このことから、帰納は可知的な通念を形成することが伺われる⁽¹⁴⁾。

アリストテレスはソクラテスの帰納と普遍的定義に対する貢献を受けて、「何であるか？」の探究を、直接的に「何であるか？」の探究という形式をとらずに、「何であるかなしに」(1078b26)探究する弁証術のシステムを展開した。『トピカ』はソクラテスが求めたものを形式的に処理する方法を展開したものと言えよう。つまり、アリストテレスは同じ探究を言論による通念の次元で、つまり同意と反対を引き出しうる次元で、より「強力なもの」(1078b25)にしたものが自らの弁証術であると理解している。しかし、弁証術が通念の次元に止まるとするならば、彼はここで知識を求めているわけではないと言わねばならない。とはいえ、通念の次元において或る主張に対し或る規則のもとに反例を提示し攻撃、論駁することは可能であって、誤った見解を抱くことを免れさせること、また或る規則に則る限りにおいて同意を得ることも可能である。そういう意味で、知識獲得に有用なものとなりうる。「そう思われている事柄」(100b21)という信念の次元においてある通念が弁証術の枠組みを決めている。もちろん、世界の実在構造への何らかの存在論的コミットメントや存在様式の分類が一つの通念として見なされても差し支えないが、弁証術はその通念が必然的に真であるかどうかよりも、その通念を基に命題を確立ないし覆えすためのトポスを提示することにこそその課題を担っている。私はこのような文脈の下に本質が一つの術語として導入されたと解する。

3

アカデメイアにおける問答術、弁証術の体系化の試みである『トピカ』において、恐らく現存の作品のなかでは最も早い時期のものとして、本質への言及が見られる。彼は弁証術の構築において「方法をもっていれば、われわれは提出された問題にたいして容易に議論において対処できる」(101a29f)とし、基本的な設計図を次のように述べている。

弁証術という方法がいかなるものどもに基づいているかをまず
理論化すべきである。もし、われわれが、議論がそれに関してあ

るその(1)数と(2)種類を把握し、また議論が(3)いかなるものどもに基づき、そして(4)どのようにそれらに対処すべきかを把握しているなら、その時われわれは提示された課題を十分に果たすることができるであろう。議論がそれに基づくものどもは、推論がそれについてであるところのものどもと数において等しくまた同じものどもである。というのも、議論は命題に基づき生じるからである。推論がそれについてあるものどもとは問題のことである。すべての命題そしてすべての問題は固有なものか類か付帯性を表示している。(種差は類のようなものなので、類のうちに配属すべきである)。尚、固有なものか或るものは本質を意味表示し、他のものは意味表示しないので、固有なものを先に述べられた二つの部分に分割しよう。そして本質を意味表示するものを固有定義と呼び、残りをそれらに与えられた共通の名指しに即して固有性と呼ぶことにしよう。(101b11-23)

これが本質という表現が現存作品のなかで恐らく最も最初に用いられている文脈である。そして本質が他の三つの同族語と共にセットで提示されていることは、それが他の同族語との関連のなかで初めて明らかにされ、その指示領域が固定されるという意味で、ここで術語化されていることを示していると言えよう。彼は述語の主語に対する帰属の様式である所謂プレディカピリア(述語づけ可能なもの)のそれぞれが何であるかを次のように規定する。固有定義とは「本質を意味表示する説明言表」である。(101b38) 固有性とは「本質を意味表示しないが、その事物にのみ属しそしてその事物と相互に述語づけられるもの」である。(102a18f) 類とは「種において異なる多くのものについて、その何であるかということにおいて述語となるもの」である。(102a31f) 付帯性とは「これらのうちのどれでもないもの」(102b4) ないし「何であれ同じ一つのものに属することも属さないこともありうるもの」(102b6f)のことである⁽¹⁵⁾。本質はこれら他の三つの命題形式の規定と同様に、固有定義という命題形式が指示するものを説明する成句であって、特定の実在に言及することなく、一つの存在様式の一般的な分類語である。そして、すべ

ての命題がこのいずれかに分類される以上、本質は他の成句と相互排他的であると言える。

議論がそれに基づいて構築されるものは、推論がそれについて関わっているものと同じものであり、同じ数であるとされるが、それは命題と問題（命題の否定の付加による質問形で表現される）のことである。そしてアリストテレスは「誰も、われわれがこれら [四つのプレディカビリア] のそれぞれは、それ自体で語られるさいに、命題或いは問題であると述べていると理解してはならず、かえって命題と問題はこれらに基づき生じることを述べているのである」(101b27f)と注意している。つまり、命題が意味表示するのはこれらのうちのいずれかであるが、これらプレディカビリアを基準にして、これだけの種類の命題・問題が成立するのである。そしてプレディカビリアが命題・問題を形成する場所は 10 個の範疇においてである。範疇とは「存在はそれが意味表示する限りの数だけ、それだけの仕方でも語られる」その存在様式の分類のことである。(1017a23f, cf.1028a10ff, 1030a11ff) 範疇は存在の語られ方として「述定の諸類」(103b20)「述定の諸形態」(1017a23)と呼ばれる。この存在様式の分類という場が「語られた四つのもの [プレディカビリア] がそこにおいて存在するところのもの」(103b21)である。例えば、性質範疇において、「白」の類は「色」であり、その種差は「視覚を分散させるもの」(153a39)であり、それにより与えられる説明言表は「定義」とみなされうる。(153b3) このようにそれぞれの範疇において「何であるか？」が語られる。プレディカビリアはクロスカテゴリーで 10 のそれぞれの範疇において命題の確立と覆えしのトポスを提供する⁽¹⁶⁾。

アリストテレスは以上 10 個の範疇において命題・問題を作るプレディカビリアが上記の三つの問いの答えを提供すると述べる。(103b39-104a1) 議論は命題・問題に基づき生じるが、その命題・問題はさらに 10 個の範疇においてある四つのプレディカビリアに基づき生じる。それ故に議論の(1)数は或る意味で 40 であり、他の意味で四つである。その(2)種類は固有定義、固有性、類、付帯性であり、議論が(3)基づくのは範疇においてあるプレディカビリアにより構成される命題・問題であるということが、以上三問への回答となってい

る。そして(4)への回答は、『トピカ』全体においてなされるプレディカビリヤをめぐるトポス論であると言えよう。(104a1f)

ここで、いかなる基準に従ってこれら四つのプレディカビリヤが提示されているかが解明されねばならない。議論や推論は命題から構成され、問題・命題を構成するものは固有定義か、固有性か、類(種差)か付帯性のいずれかである。類と固有性は固有定義の「構成要素」(120b12)と解しうるのは固有定義を基準にし、これらが選出されたことを示している⁽¹⁷⁾。そして固有定義の要素たりえないものを一括して付帯性に分類したことが伺われる。従って、プレディカビリヤ選出の基準は本質であると言ってよい。こうして、問題・命題を分析する基準は、述語が主語に固有定義、固有性、類、付帯性との関連においてあるのか、あらぬのかという仕方では、四つのタイプに分類される。(101b37, 103b24) この方法の特徴は、「イエスまたはノー」で応答できるような問いの立て方をするところである。例えば、「人間は何であるか?」や「善はどれほどの意味で語られるか?」は「弁証術の命題ではない」とされ(158a14ff)、「陸性の二本足の動物は人間の定義であるか、それともそうでないのか?」(101b32)という仕方では問われねばならない。先に、ソクラテスの弁証術においては「何であるかなしに」対立するものを考察することができなかったを見たが、私はアリストテレスはプレディカビリヤをめぐる命題・問題の形成の方法化により、弁証術を強力なものにするよう試みたと解する。つまり、ソクラテス以来の「何であるか?」の問いを、アリストテレスはこれらの四つの問題ないし命題の様式において分節して、トポス論として弁証術に組み込んだのだと思われる⁽¹⁸⁾。

そのことは四つのプレディカビリヤすべてが「定義的(ὁριστική)」と呼ばれていることに現われている。(102a5-17)彼はプレディカビリヤと定義の関係を次のように述べている。

われわれは固有なもの〔固有定義(本質を意味表示する説明言表)を含む〕そして類さらに付帯性に対して語られるすべてのことは定義に対しても語られるにふさわしいことを忘れないようにしましょう。というのも、固有なものについてのよう、定義の下に

あるもの [対象] それだけに何かが属さないことを示すなら、或るいは定義において与えられたものが類ではないか、または説明言表のなかで語られたものの何かが属さないこと—それはまさに付帯性について語られるであろう—を示すなら、われわれは定義を覆えすことになるであろう。かくして、先述の説明によれば、枚挙されたもの [プレディカビリア] すべてが何らかの仕方 で定義的なものであることになろう。(102b27-35)

即ち、ここで定義の形成にこれら四つのプレディカビリアが何らかの仕方に関わり、その共通性の故に同族術語として枚挙されている。定義を試みる時、これらのいずれかを述べることになる。固有性および類は固有定義の構成要素であると言える。すなわち前二者の探究が固有定義を形成させるということである。他方、付帯性についても実際には定義とならないにもかかわらず、定義として提出されうるために定義的と言われていると思われる。というのも、定義の必要条件である同一性を一時的に満たすことがあるからである。付帯性は一時的かつ相対的に「固有性になることがあっても差し支えない」とされる。(102b21f) 例えば、「戦場で後退しないこと」が或る局面で「勇気」に固有性になることがあっても差し支えない。アリストテレスは「定義的」を規定するさいに「定義との関わりでは、最も多くの研究が果たして同じものか異なるものかについてなされる。定義と同じ方法の下にはいるものどもすべてを、端的に、定義的であると語ることになろう」(102a7-10)と述べている。このように同一性条件を満たす場合に定義として提示されることもあることから、付帯性も定義的と言われるが、それが付帯性であることが判れば、ただちにその定義は覆えられることになる。例えば、「戦場において後退しないこと」という一事例が「勇気」ではなく、「向こう見ず」や「臆病」に属することを示しうるなら、これは「勇気」の付帯性にすぎないことがわかる。それが定義であるという主張は覆えされる。

4

プレディカビリアの選択が、このように定義であると申し立てられたものの分類の文脈でなされたとすれば、これはソクラテスの「何であるか？」の探究を、それを直接問わない形式において洗練化を試みたものであると言える。プレディカビリアの分節により、ソクラテスと対話者のあいだにおいて生じた混乱を回避することができる。

ソクラテスの定義の試みにおける特徴は、事例の提示による説明言表の形成の拒否にある。例えば、ソクラテスは「勇氣は何であるか (τί ἐστὶν ἀνδρεία)」(Laches, 190e) を探究するさいに、「戦場において後退しないこと」等の事例による答えでは満足せず、苦痛や欲望や病氣等「これらのすべての場合において、同じものとして存在する勇氣とは何であるか」を問う。(191e) さらに、ソクラテスは「敬虔と何であるか (τί εἶναι τὸ ὅσιον)」の探究において、対話者の「不正を犯した父を訴えること」が敬虔であるという答えに満足せず、「いったい敬虔というアイデアそれ自体は何であるのかを私に教えてくれ」と要請している。(Euth., 6de) また、「知識とは何であると思うか (τί σοι δοκεῖ εἶναι ἐπιστήμη)」(Theae., 146c) が問われる場合にも、靴作りや木工作り等職人たちが心得ている技術が知識であるとする見解に、ソクラテスは「われわれの問題は、知識の数をきめる考えで問われていたのではなく、知識をそれ自体として、いったいそれが何であるか (ἐπιστήμην αὐτό ὅτι ποτ' ἐστίν) 知ろうと思って問われていたのだから」(146e) と応答している。

ソクラテスのこれらの探究において共通することは、最初「Xは何であるか？」を問い、それに対する応答がXの事例である場合に、ソクラテスは事例を聞いているのではなく、「Xそれ自体は何であるか？」を問うていると説明していることである。勇氣ある個々の事例において同一のものとしてある勇氣それ自体とは、また敬虔がそれ自体として、知識がそれ自体として何であるかが、総じて対象が「それ自体」として何であるかが問われている。「ソ

クラテスの時代に展開された」と言われる「本質すなわち実体を定義すること」は、「何であるか？」が含意する複数の問いの一つに答える試みであると言ってもよい。(642a26-28) つまり、これらの問答から想定されることは、言語形式上は「Xは何であるか？」という問いに対する答えとして、それはソクラテスを満足させなくとも、事例により答えることが一つの応答であるような問いと、実際には「Xそれ自体は何であるか？」という問いに対する答えとして、定義を与えることによって初めて答えとなるような問いである。

類や種差による応答は皆「何であるか？」(eg.102a34, 108b1, 128a14, a20)の問いに対するものと理解しうる。しかし、類や種差による「何であるかということにおいて述語となるもの」(102a32)という応答も、ソクラテスが欲しているそれ自体の問いに対する応答ではない。アリストテレスは説明言表が類か種差のどちらかを取り残す場合には、本質を述べていないとしている。例えば、「正義」を「等しさを作り出すことのできる状態」と定義するひとは、類である「徳」を踏み越えているので、「正義の類を取り残しており、本質を述べていない」ことになる。(143a18f) また、「風」を「空気の動き」と定義するひとは、空気がどのようにまたどれほどの動きをすれば、風が起きるかを特定しておらず、「何であれ種差を取り残すと、本質を述べていない」とされる。(146b31f) 構成要素による応答は「定義されるものは、それがそれ自体に即してであれ、類に即してであれ」という仕方ですそれ自体による応答と対比されている。(146a36)

アリストテレスがひとつの定義に関するトポスとして、定義において「それ自体」か「類」が語られていないかどうかを考察しなければならないとしていることは、ソクラテスの探究との関連で重要である。(146a36ff) 第5巻では固有性〔本質を除く〕の諸トポスが提示されるが、そこでも固有定義が「それ自体」を表示するとされている。

一つの命題を覆えそうとするひとは、ものそれ自体を自らの固有性としたかどうか〔を考察しなければならない〕。なぜなら、固有性であると提示されたものが固有性ではないであらうからである。というのも、すべてそれ自体は自らであることを表示するで

あろうからである。しかし [それで] あることを表示するものは固有性ではなく、固有定義である。(135a10-12)

このように、『トピカ』における固有定義はソクラテスの「何であるか？」の探究において求めていたものと言える。私はこのそれ自体の問いに対する応答が本質を意味表示する固有定義であると解する。

以上が、ソクラテスの探究を批判的に継承展開した『トピカ』という作品において本質が導入されそして論じられている文脈である。プレディカビリヤはすべて定義的なものとして、ソクラテスの「何であるか？」の探究を分節すべく考案された。弁証術は命題・問題の確立と覆えしに従事するが、それはプレディカビリヤをめぐるトポス論として展開される。具体的には、アリストテレスはソクラテスの事例の問いと自体の問いの相違に対応しうる応答として、問題・命題をめぐる四種類の問いと応答を設定し、固有定義が本質を意味表示するものとして、その他の三つの述語形式から区別すべく提示している。換言すれば、「何であるか？」に対する応答として「何であるか *τὸ τί ἐστίν*」が考えられるが、「何であるか」が言語形式上、事例・付帯性の応答そして構成要素の応答、さらには自体的同一性の応答でもありうるので、私は固有定義によって示されるものに対する言語表現上の区別のために本質が作られたと解する。自体的同一性の問いにおいて、もし定義がうまく与えられれば、被定義項 X は定義項と同一なものとなり、X それ自体が明らかにされる。本質という成句はこの自体的同一性の応答を表現する、言語表現上の工夫にすぎないと言える。哲学的に意味を深読みする前に、つまり本質が存在の原理としていかなる実在を意味しているかを吟味する前に、その文脈と言語表現上の意味を確定しうるならば、或る実在に対してなぜこの成句が用いられるか理解できるであろう。

5

ここで本質を意味表示する固有定義の確立と覆えしをめぐるトポスをいくつか具体的に見ることにしよう。一つは定義形成のプロセスについて、さら

に固有定義と固有性の区別について、もう一つは定義における可知性の問題について検討する。

まず、定義形成のプロセスに関して、「種差を発見すること」と「類似なものの探究」は何であるかの認識に有用な「道具」とされている。(105a21-25)⁽¹⁹⁾ 種差の発見は類を前提にして、その類そのもののなかにおける相互の差異を考察することである。(107b39-108a1) その意味で定義の形成において「第一に指定されるものは類」(142b29) でなければならない。(cf.132a17-21) そのために有益なことは類似なものの探究である。これは個々の類似なもののサンプルを収集することにより「一般的なもの」(108b11) を導く帰納法に基づく。それは「個々のものにおいてなにか同じものを認めえるならば、定義するさいに当該のものをいかなる類に入れるべきか迷わない」ですむためである。(108b20-22) 例えば、海における風と空気における無風は静止という類において同じものとして扱いうる。こうして、すべてのものに共通なものを、類として与えるという仕方では定義することが要請され、「定義する人たちは、ほとんどこのような仕方では定義を与える慣わしである」(108b28f) とされる。

その上で種差の発見が課題となる。例えば、徳という類のなかで、正義は勇氣といかなる点において異なっているかを考察しなければならない。そして種差の発見は同と異についての推論に対して役に立つ。例えば、理性的であることの発見はそれが帰属する動物が人間という種において同じであることを確立させる。しかし、そればかりではなく、「それぞれが何であるかを認識するためにも役立つ」(108a38-b1) とされる。「というのも、それぞれの実体の固有な説明言表はそれぞれについての固有な種差によって区別することがわれわれの慣わしとなっているからである」(108b4-6) ここでアリストテレスはアカデメイアの「習慣」(108b6, b28) として分割法による定義の形成に言及している。そしてこの分割法が前提しているのが、類似なものの探究と種差の探究であり、それは基本的に帰納の仕事である。

次に、固有定義と固有性の差異について検討しよう。種差はプレディカビアの提示のさいに「類のようなもの」(101b18) とされたが、何故そうであるかと言えば「類と種差は、種が存在する限り、随伴する」(123a18f) もので

あり、種の定義形成に両者は不可離なものだからである。その意味で類と種差は双方とも「何であるかにおいて述語となるもの」と言えるであろう。(153a18, cf.128a20-21) 種差を述べる際に重要なトポスは種差を「類の種差」それも「事物に固有な種差」として述べたかどうかである。(143a29-31) さもなければ、「動物や実体が定義されないことは明らかである」(143a32-33)。アリストテレスは「何であるかを与えるものという点では、類を語るほうが種差を語るより一層適っている。というのも、人間は動物だと言うひとは陸性だと言うひとよりも、人間が何であるかを一層表示するからである」(128a23-26) と述べている。このように類に属する特徴(種差)のほうが、種に属する特徴(種差)よりも、一層何であるかを表示すると考えられている。定義に用いられる種差は類を前提にして、その範囲のなかで類に属する種を他のものから区別する類の種差を探すことによって得られる。そこに固有定義と固有性の分岐点があるように思われる。

固有性を固有定義から区別するトポスの一つは、定義の対象は類のうちにあるが、類のうちに置かれていないかどうかを吟味することである。(142b22f) 例えば、「人間」の定義として「数えることを知っているもの」を与えた場合、「物体」の定義として「三次元を持つもの」を与えた場合(142b25f)、それぞれ数えることを知っているものが何であるか、また三次元を持つものが何であるかが述べられていないので、人間、物体の定義としてふさわしくない。それらは、それぞれの固有性であろうが、固有性は対象をそのなかに置くものではない。あまり事例にこだわってはならないが、人間について「知識を受け入れうる動物」(132a20) は固有性であり、「陸性の二本足の動物」(132a1) は「本質を意味表示している」ことが指摘されている。両者の説明言表の相違は後者が類である動物の種差を与えているために固有定義となる可能性を持つと思われる。人間の「文法能力」や「知識受容能力」などは類である動物の種差とは言えない。類がそれ自身として持つ類を分節している諸特徴により事物に固有な種差を述べる時、固有性ではなく本質が意味表示されるとアリストテレスは考えていたと思われる。

第三に、定義における可知性の問題を検討する。これは弁証術の基本的な

前提と言える通念の特徴を理解する上で、従って弁証術の特徴を理解する上で重要である。定義そして固有性は対象を「認識するために」作られる。(139b14, 141a27, 129b7f) 従って、両者とも対象よりも「より可知的なものによって与えられねばならない」。(129b8, 142b33) 可知性には二義あり、「われわれにとって」より可知的なものと「端的に」より可知的なものがある。(141b4-5) 端的な可知性については、三つの事例により示されている。一つは、算術における、単位が数より可知性において先であること、他は幾何学における、点は線より、線は平面より、平面は立体より可知性において先であること、もう一つは言語学における、字母が音節より先であることが挙げられている。(141b6-8) その理由としては「単位はすべての数より先であり、その端初であるから」(141b8) と存在者間の先後性が挙げられている。存在構成上より先なるものが端的により可知的である。(141b5 f) これは「ちょうど諸論証における場合のように」(141a29f) と言われる一つのトポスを提供する。「教授と学習」(141a30) のさいになされる論証がより先なるものに基づき与えられるように、定義もより先なるものに基づく。つまり定義は「より先でそしてより可知的なものにより作られているかどうか」を検討しなければならない。(141a29) 定義はより先で端的により可知的なものによる場合に「よりうまい定義」であり、またそう「定義されるべき」とであるとされる。(141a33, 142a7-8) 本来的な定義が満たさなければならない「より先でそしてより可知的なものによる」という条件を「定義制約」と呼ぶことにする。

この定義制約により、同じものについて多くの定義は不可能であるということが導かれる。つまり、複数の定義が可能でないのは、それは存在者間の先なるものにより与えられる可知性の秩序の故である。この可知性の秩序を作るものは「それがまさにそれであるところのものは、存在者のそれぞれにとって一つであるから」(141a35) というアリストテレスの存在論的コミットメントである⁽²⁰⁾。ここで「それがまさにそれであるところのもの」とは事物がそれ自体として同一である「本質」(141a24) を説明した成句である。事物の一性つまりその本質の一性の存在が定義を定義として成功させる。

しかし、議論の訓練の書である『トピカ』においては、定義制約は一つの

トポスとして提示されるにとどまる。対話相手によっては端的により可知的なものによるのではなく、「適宜に」(142a13, a33)つまり、議論に有利なように「その人たちに可知的なものによって説明言表を作らねばならない」場合も認められている。(141b18f)例えば、端的な可知性の秩序において立体よりも平面のほうがより先であるが、「平面」を「立体の限界」という可知性においてより後なるものによる定義の可能性が指摘されている。(141b22)しかし、この場合「同じものが、たまたまわれわれにより多く可知的なものであると同時に端的にもより可知的でないなら、定義されるものにとっての本質を表示することはできない」(141b23-25)と注記されている。このことは二つのことを含意している。一つは、アリストテレス自身はたとえ認識上そして存在上端的により先なるものに基づく秩序にコミットしているとしても、命題・問題の確立と覆えしをめぐる弁証術の次元においては、それを一端括弧にいれて議論することができなければならないということである。もう一つは、われわれにとっての可知性と端的な可知性が両立可能であるということである。

『トピカ』においては二つの可知性は二律背反する区別ではなく、「思考がより厳密な状態にある人」(142a4, 141b13)にとっては、「感覚的对象」より遠いものがより可知的であるとされている。(142a3, 141b10)ここでは可感的対象はわれわれにとってより可知的であり、普遍はより少なく可知的であるという帰納のプロセスを前提にして語られている。帰納は基本的に個と普遍という数の多少の次元で実践される。帰納は「個々のものどもから普遍へつまり可知的なものどもから不可知的なものへ導く」(156a4-6)ことである。そのため帰納の結果として「より通念でありかつより可知的な」普遍的命題の形成が可能となる。(159b8 f, cf.155b22)それ故に、固有定義によって意味表示される本質は、定義制約の故に事物にとってただ一つであるが、しかし、弁証術的な訓練により、それを端的に可知的でありかつわれわれにとっても可知的となるものによる通念に基づき、定義する可能性は否定されていない。(cf.105a16-19)このことは確かに本来的な定義は定義制約を満たさねばならないが、弁証術の次元つまり通念の次元においては、本質の認識のための定

義形成において、存在の因果構造上の先行性がどうであれ、われわれからの定義実践による実在へのアプローチを許すということである。

『トピカ』において定義がそれについてある何であるかは基本的には種—類—上位の類の包摂関係において理解されている。(121a7, 122a35-37, 122b1f) その際、包摂関係を定めるのは帰納法による類と種差の探究である。そこで前提になっていることは類種系列は帰納法によって可知的なものとなる分類構造であるという認識の構図である。種を可知的なものにするのは類と種差である。「種差は類よりも後であるが、種よりも先であるに違いない」(144b10f)と言われる時、それは存在構成上の先後に対する信念であり、そしてそれは端的な可知性の先後の主張でもある。弁証術においては、われわれにとって先なるものに基づく帰納による類と種差の探究が存在上の先後を確認してゆく。『トピカ』は基本的にこのような帰納的アプローチを取っていると言える。換言すれば、弁証術はわれわれにとっての可知性を鍛え挙げ、普通の次元において通念を形成し、そのもとで本質や固有性を認識させるのに有益である。

定義制約をめぐる重要な論点は、『トピカ』においてつまり弁証術において、アリストテレスが事物の因果構造の先後性にコミットしているかどうかということである。「諸論証における場合のように」という記述は一見それを伺わせる。『分析論後書』において展開される論証においては、「論証の原理は根拠でありそしてより可知的でかつより先でなければならない。根拠であるというのは、われわれは根拠を知る時、その時科学的知識を持つからであり、またいやくも根拠であるなら、より先であるからである」(71b29-31)と言われる。この根拠を基準にして事物の先後性と可知性の秩序が決定される。しかし、アリストテレスはこの章で「根拠」について一切言及することなく定義制約を述べている。定義制約をめぐって、論証は定義と平行的な関係にあるということが述べられているにすぎない。定義制約の「より先」の説明は存在者間の先後関係の類種の次元における例示によって与えられるに留まる。彼は「うまく定義するひとは、類と種差によって定義すべきであるが、これらは種よりも端的により可知的でありかつより先なるものどもである」

と述べている。(141b25-28) 先の線と面の先後性にしても、面の定義は類である図形とその種差であるしかじかの線により構成されるであろう。彼は弁証術の実践において必要な程度においてだけ、「より先」について言及していると言える。つまり、弁証術においては、存在上より先なる根拠が可知性の秩序を決めるのではなく、存在上の「より先」は、類と種の次元で考察されており、われわれの側から始まる帰納を基にした可知性の構図に依拠していると言える。

『トピカ』においては分割による定義は因果的な構造に踏み込むことなしに、命題・問題の確立と覆えしをめぐる相応の機能を果たしうることは認められよう。(cf.151b24) その働きは「何であるか？」を認識させるのに有用な方法であるということである。そしてそれは基本的にわれわれにとって可知的なものから、端的に可知的なものへと向かう帰納法が、むしろ類種系列の可知性という場において実践されていることを示している。『トピカ』は類種系列という通念の次元において得られる可知性の秩序のなかで、命題の確立と覆えしのトポスを論じるものである。さもなければ弁証術は成立しない。そこでは、存在上の先後をそれ自身の領域において探究する、事物の因果構造に対する探究は留保されている。個と普遍という数の次元で思考が働く帰納法は基本的に事物の因果構造を解明することにおいて限界がある。或るいはそれを自らの任務としてはいないと言うべきであろう。換言すれば、帰納が事実上存在の秩序においてより先なる根拠を把握することがあるにしても、根拠を根拠として把握するのはもはや帰納の任務ではなく、論証の仕事である⁽²¹⁾。因果構造が解明される時、そこではもはや通念という信念の次元を乗り越えて、知識が獲得されるであろうからである。

このような事情であるとすれば、『トピカ』における定義制約は必ずしも事物の因果構造に基づいて提示されているのではないと理解できる。「諸論証における場合のように」という一文は、類と種差による定義における定義制約の特徴が、論証におけるように、定義の場合にも平行的に見い出されるということであり、しかも、そこでの「より先なるもの」とは論証のように必ずしも事物の根拠を意味すると理解する必要はなく、弁証術の実践の範囲内で

理解されうる存在構成上より先なるもののことである。

『トピカ』において提示された本質は(1)対象 X にとって一つあり、X それ自体であること、(2)帰納法により発見される類と種差に基づく固有定義により意味表示され、他のプレディカピリアとは相互排他的であること、(3)クロスカテゴリーであること、(4)因果構造にコミットしていないこと、(5)本質の(1)–(4)の諸特徴はプレディカピリアをめぐる命題の確立と覆えしのひとつの形式的基準となること、とその意味そして特徴を纏めることができよう。また、『形而上学』においては、本質は「何であるか」の一つの実在様式として、そのまま満たされるべき実在の条件となり、その指針に即して「本質がいかにあるか」(1025b26)の探究が行われる。このような仕方では本質の術語としての使用の文脈は確定されている。彼の本質探究の弁証術的な基礎が『トピカ』において据えられたのである。

6

ここで本質の言語構造を分析しよう。本質がいかなる文脈において、いかなる意図で導入されたかに関する以上の分析に基づく時、M. Loux 等が本質という表現形式について「その表現のいかなる説明も推測的なものである」⁽²²⁾ということにはもはやならず、この成句の言語構造をひとつの基礎づけの下に読み解くことができると思われる。そしてその読み解きはフィードバックという仕方では先の分析の確かさを増すであろう。 $\tau\omicron\ \tau\acute{\iota}\ \eta\nu\ \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ という表現は疑問文を残した上でそれに対する応答とすべく冠詞 $\tau\omicron$ が前置され、一つの成句を形成している。論争点はその原形と二つの Be 動詞をめぐっている。一つは何故 $\eta\nu$ という未完了過去が用いられるのかということ、もう一つはこの成句には通常与格形で対象 X が補われるが、X を補語とする $\epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ は「述語的主格」であるのか、それとも「存在用法」ないし「絶対的用法」であるのかということである。前者であれば、「X であることは」という意味となり、後者では「X にとってあるということは」と訳されることになる。まず原形に関して一般的な了解を得、Be 動詞をめぐる二つの論点を解明した

い。

研究者たちは「本質」は元来より長い表現を簡潔にして成句にされていると考えている。Ross はこの成句は「血それ自体にとって血であることは何であったか? (*τί ἦν αὐτῷ τὸ αἷματι εἶναι;*)」(649b23) というような疑問の表現からの「一般化」であるとして⁽²³⁾。本質はそれだけで表現されることが多く、それは術語であることを示唆するが、本質の後に対象 X が与格や属格で補われることも少なからずある。そのなかでは与格で補われることがほとんどであるが、「X の本質」(eg.1032a2, 1032b2) という仕方では所有の属格で補われることがあることは、与格の場合も、それは「所有ないし関心の与格」であり、「X にとって本質」を意味することを示唆する⁽²⁴⁾。また本質の内部に与格で対象 X が入り込むことがあるが、それは二番目の *εἶναι* の補語となる。(eg.1030a2, 1031b7, cf.640a34, 1029b27) Frede & Patzig 等は元来は本質がその本質である対象 X がもう一つ与格において定冠詞とともに現われて、例えば “[τὸ] τί ἦν τῷ ἀνθρώπῳ ἀνθρώπῳ εἶναι” (“人間にとって、人間であることは何であったかと言うこと” “Was es für den Menschen heißt, ein Mensch zu sein”) というものであり、本質はその短縮型であることを推測している⁽²⁵⁾。その際、本質内部に置かれる与格は確実に述語的主格として「X であることは」を意味することになる。原形については推測の域をでないが、Ross が推測するように、この血についての強意代名詞 *αὐτῷ* 「それ自体・そのもの」を伴う本質の表現が原形であった場合、私の自体的同一性の問いに対する応答としての本質という理解に即応する。本質の元来の形は「X それ自体にとって X であることはいったい何であったか? *τί ἄρα ἦν αὐτῷ τὸ X εἶναι;*」という疑問文であったのではないかと推測される。そして、これが成句として一般化、術語化されるさいに短縮されたと考えられる。ここでは一応、成句本質はそれが簡略化され一般化されたと理解しておこう。

何故未完了過去 *ἦν* が用いられたかに関しては諸説がある。研究者により提示された諸見解を私の立場からコメントし、その上でこれまでの議論に即して文法的にも無理のない解釈を試みたい。(1)この成句は問答形式であり、応

答は「以前に問われた」ことに対してするものであるが故に未完了過去形を取る⁽²⁶⁾。しかし、この未完了過去の位置は疑問詞 $\tau\acute{\iota}$ に支配されており、「X[そのもの]であることは何であったか?」という疑問文のなかに登場している。(cf.1030a31) この説によれば応答として過去形が用いられるという主張になるが、アリストテレスは過去の疑問文に対して冠詞 $\tau\omicron$ を前置することにより応答としている。私の理解によれば、「何であるか?」に対して、形式上その応答は $\tau\omicron\ \tau\acute{\iota}\ \epsilon\acute{\sigma}\tau\acute{\iota}$ であり、それを分節して本質と「何であるか $\tau\acute{\iota}\ \epsilon\acute{\sigma}\tau\acute{\iota}$ ということにおいて述語となるもの」が区別されたというものであった。これら二つの応答において、 $\tau\acute{\iota}\ \eta\nu$ も $\tau\acute{\iota}\ \epsilon\acute{\sigma}\tau\acute{\iota}$ も疑問文であり、前者に未完了過去が用いられ、後者に用いられないことを説明できるものでなければならない。(2)この成句においては個々の存在者に先行し根源的で永遠的な存在、「非時間的離存形相」に「客観的な意味を添える」べく未完了過去が用いられた⁽²⁷⁾。このプラトンの解釈はすでに『トピカ』において本質の实在的解釈にコミットするものであるが、あらゆるものを対象にする弁証術の方法化のなかで、しかも本質がクロスカテゴリーに用いられるという状況からして考えられない。アリストテレスの形相の存在は個々の質料においてそれが具体化される以前に存在し、それを表わしているという理解も同様である。アリストテレスの形而上学の体系のなかで本質は形相として存在するということがあるにしても (eg.1044a36)、弁証術の体系化のなかで本質の言語形式が提示されており、その範囲で解釈すべきである。(3)この未完了過去形は定義における主語と述語の同一性を「強調」すべくまた意識にもたらしべく使用されている⁽²⁸⁾。確かに、何であるかの探究の対象とその定義項は同一でなければならない。その同一性は相互に述語づけられることを一つの特徴として持ち、本質を示すさいの一つ条件となる。しかし、(1)の議論と同様に、この未完了過去の位置は疑問詞 $\tau\acute{\iota}$ に支配されており、「X[そのもの]であることは何であったか?」という疑問文のなかに登場している。この説によれば応答としての述語がすでに提示されており、その問題は解けない。文法的にも、 $\eta\nu$ に強調の意味があるとするものは見られない。むしろ、疑問文においては強調は $\pi\omicron\tau\epsilon$ や $\acute{\alpha}\rho\alpha$ に担わされる。(4)この未完了過去形は持続を表現してい

る⁽²⁹⁾。その解釈によれば「Xであることは何でありつづけたかということ」になろう。しかし、ソクラテス的な問答の現場において「そもそもそれはいったい何であるか？」という表現においてであれ、持続を現在形においても理解することができるので、過去にする必然性はないといえる。(5)この成句における $\eta\nu$ は「哲学的未完了過去」である。これは一つの先行する議論に関して過去形が使用されている、その先行する議論の結論となる何かを表現するものである。この見解は近年においてもいくつか見られるが、Ross はすでに哲学的未完了過去が用いられるのは、過去形においてすでに表現されている先行する議論がなされることが要求されるが、本質の場合それは「数少ない」として疑問を提示している⁽³⁰⁾。

何故 $\eta\nu$ が用いられたかに関して、これらの諸説を踏まえながら、ここで私見を提示したい。本質はソクラテスにより展開されたという先の報告を確認したうえで、私はソクラテスの問答において、彼は「何であるか？」の表現形式しか持たなかったが、事例の問いと自体的同一性の問いを区別していたことに注目したい。そして自体的同一性の問いを問う表現形式には $\piοτε$ 「いったい」という小辞の付加による強調のうちに、「いったい X は何であるのか？」とソクラテスにより問い直されていた。アリストテレス自身の自体的問いの文字通りの表現のなかにも、「語られているものはそれ自体に即していったい何であるか？ $\tau\acute{\iota} ποτ' \acute{\epsilon}στι\ \tau\acute{o}\ \lambdaεγόμενον\ καθ' αὐτό$ 」(102b14) という仕方で $\piοτε$ による問い直しの強調を見い出すことができる⁽³¹⁾。Goodwin によれば $\piοτε$ 同様強調の小辞である $\acute{\alpha}ρα$ (「それでは」) を通常伴う未完了過去 $\eta\nu$ の機能について次のように述べているが、それは自体的問いが問われる状況に合致する。

未完了過去 $\eta\nu$ は (一般に $\acute{\alpha}ρα$ を伴って) 話者や書き手により、以前には否定され、見過ごされ、或るいは理解されていなかったものが、まさにそのものとして認識される事実を表現することができる⁽³²⁾。

私はこの未完了過去の用法を「問答の未完了過去」ないし「弁証術的未完了過去」と名付けたい。この説明は疑問文においても、適用されるであろう。

疑問文における ἄρα の役割は「問い手の懸念」⁽³³⁾ を表現するとされる。「X は何であるか？」をソクラテスが尋ね、対話者による応答に満足しない時に、理解されずに見過ごされていた X そのものが一体何であるのかが続いて問われる。欲する答えが与えられない懸念とともに、理解されていなかった事実「X そのもの」が ᾗν という未完了過去を介して新たに問い直されている。事例の応答によっては見過ごされていたものがあることに気付き、いったい問われていたそのことそれ自身が何であるのかが問い直されているということである⁽³⁴⁾。ἄρα は成句となる段階で脱落したか、或るいはこのタイプの ᾗν は必ずしも ἄρα を伴わないので、ᾗν が単独で用いられていると思われる⁽³⁵⁾。既に多く指摘されているように、過去の表現形式は実質には過去のことを意味しないであろう。弁証術的解釈は、新しい事実の判明によって、問答のやりとりのなかで過去形が使用される対話の現場性を捕えることができる。日本語においても、犯人であると思っていた人がそうでないことがわかり、「いったいお前は何だったのだ？」と過去形で表現することがある。この解釈は問答つまり弁証術の文脈のなかでこの成句が導入されていることをよく説明できるように思われる。

もし本質がこのような問答の現場で「何であるか？」の問い直しの表現形式であるとするなら、ソクラテスが求めたものからして、もう一つの be 動詞の理解も自づと明らかになるであろう。不定法 εἶναι を be 動詞の絶対的用法つまり存在用法であるとする解釈は問答の主題から逸脱することになる。つまり、「X にとって存在することは」と理解すると、対象の存在を確定する作業が必要となるが、それは弁証術の仕事ではなく、論証理論の役割である。本質は弁証術の文脈で提示されていることからして、与格プラス εἶναι は述語的主格「X であることは」として探究の対象の特定化を試みたものと理解すべきである⁽³⁶⁾。未完了過去の使用は本質が弁証術の文脈において、問答の現場から一般化された表現であることを裏付ける。以上で本質の言語分析がなされたとしよう。

7

『トピカ』においては本質をめぐる思索は途上であり、いくつかの課題を残している。一つは、帰納を基にした事物の可知的な分類構造において、類と種差は「これこれのものども」つまり「類+種差」を意味するのか、それとも「これこれのものどもから成ったもの」つまり合成体を意味するのかは検討課題とされている。(150b27ff) つまり、両者の「結合」(151a21)の様式がいかなるものかが一つの問いとして提示されるが、これは事物の存在根拠をめぐる『形而上学』の大きな課題となる。また、類と種差による可知的空間における定義論と論証による説明を含む定義論においては本質の理解とその使用の文脈もかわってくるのか課題となる。アリストテレスは「固有定義が何でありまたいかに定義されねばならないかは、他のより正確な仕事により与えられねばならない」としている。(153a11) 『トピカ』の次元においては、類と種差による定義論は不完全なままで、因果的な説明を含む定義論を展開する『分析論後書』そして『形而上学』へと持ち越される。

ソクラテス的な帰納による何であるかの探究にその概念上の誕生を持つ本質は、分割法による可知的空間形成の文脈において『トピカ』で術語化されたが、それが『分析論後書』や『形而上学』等においていかに展開されるかを本稿において十分に論じる余裕を持たない。しかし、今後の探究の方向性の確認として、本質がいかなる仕方でも因果論的役割を担うべく、彼の体系のなかに組込まれているかを検討したい。本質は形相としばしば同定されるが、それはいかなる意味においてであるかを明らかにしたい。(cf.1035b32, 1032b14, 1074a35, 94a21, 198b8) というのも、これが確定されなければ、一つの重要なアポリアを抱えたまま終わらざるをえないからである。つまり、一方、形相は、説明を求める探究において解明される因果構造において、質料に統一をもたらす、それ自身他のものによっては根拠づけられない最も先なるもの、基礎的なものである。形相はそれ自身定義の対象(被定義項)にはなりえない。(1043b28-30) 他方、『トピカ』において、本質は類と種差に

よる定義の試みによる何であるかの可知的な空間を形成するさいに、可知性においてそれらより後なる種それ自体を意味表示しているように思われるからである。もし『トピカ』における定義の試みが、論証理論のような説明論的アプローチに基づく因果構造を反映するものであるとするなら、これは解決しえない矛盾をはらむことになる。以下『分析論後書』と『形而上学』における関連箇所分析を行い、このアポリアの解決を試みることにする。

8

このアポリアを解決するために、アリストテレスの方法論において基本的に確認すべきことは、帰納は事実上因果構造上先なるものを可知的なものにすることができるとしても、因果構造上の先後を先後として確定することはできないことである。『分析論後書』において「分割に基づいて定義する者」(91b36)の問題点が指摘される。この書において展開される説明の理論においては、本性上最も先である根拠により、その事物・事象が持つより後なる諸属性を必然的なものとして統一的に説明する体系を構築することがめざされる。帰納に基づく分割法は例えば「人間」を「可死的な有足の二本足の羽のない動物」(92a1)と定義し、事実上それが根拠を言い当てたとして、「二本足」と「羽のないもの」のうちどちらが因果的に先なるものであるかを決定できない。常に「何故に？」がそこで問われうる。それ故に、定義項が全体として一なるものであることを、さらには被定義項が定義項と同じものを意味表示するのを保証するものがないことになる。(92a29-34, 92b19-25)『分析論後書』において本性上先なるものによる後なるものの説明の条件を展開する論証理論は、この分割法の克服として、先行性条件と一性条件を満たすことをめざしている。その結果「何であるかは論証を通じて可知的なものとなる」(93b15-17)とされるが、それは説明を含む定義が論証を通じて獲得されるからである。

しかし、探究論において分割法は「何であるかにおいて述語となるものを狩る」(96a22)さいに有益であり、つまり何であるかの可知的空間を形成す

ることができ、「何故に？」の説明の理論により因果構造上把握された実在が「何であるか？」の探究における類種の可知性のなかに取り組むことを可能にさせる。『分析論後書』(eg.B 5, B 13)においてもまた『形而上学』(eg.Z 12-15)においても分割法は「何であるか？」の探究において独自の役割を担っている。アリストテレスが「何であるかを知ることと何故にを知ことは同じである」(90a31f)と言う時、類と種差による定義と根拠と結果による定義が意味表示するものが同一であることを主張している。それ故に、『分析論後書』においては、帰納法による「何であるか？」の探究と論証による探究は相補的であり、「何であるか？」の説明言表の真理性と「何故に？」の説明言表の真理性は相互依存的であると言えよう。この相補性を、現用言語の規範性に則り、通念となっている類種の可知的空間においてサンプルを提示し「何であるか？」において対象そのものを探究するソクラテス的方法を表現するロギコースな手法と現実世界への参照のなかで「何故に？」の自然学的探究の方法を表現するピュシコースな手法の相補性において捕えることができよう。

ここで『形而上学』Z巻における本質探求の論述を分析したい。『形而上学』において、本質はロギコース（一般（形式）言論上）に語られるものであることをまず指摘しなければならない。(cf.1041a28) これは「いかに語るべきか？」という視点から、現実世界における具体的事例を参照することなしに、「いかにあるか？」をめぐる存在主張をなす探究様式である。Z4-6において、「いかに語るべきか？」という視点から本質の存在様式は「いかにあるか？」が探究される。ここではいかに語るべきかという視点から、本質の「いくつか」(1029b13)の特徴が「～でなければならない」(eg.1031b11, b 22)という仕方で言論の力により導出される。ソクラテスは「Xは何であるか？」の探究において、Xの事例や構成要素ではなく、Xそれ自体を問うていた。それをアリストテレスは「まさにそれ[X]であるところのもの」「何か他のものであることなく、まさにそれ[X]であるところのもの」を意味する「本質」により表現し、これらは内容空疎ではあるが、厳密な自己同一性を陳述するものに他ならない。(1030a3, 73b8, cf.141a35)事物が端的に一なるものである

場合に、端的に本質がある。また事物が一なるものであることを表現するのが「本質」という語である。探究対象がまさにそれであると語られるそのような同一なもの・本質はいかなる仕方で語られうるのか、いかなる存在者に本質があると語りうるのかがZ4-6においてロギコースに問われる。

『形而上学』Z巻において「実体は第一にそして端的に存在するもの」のことである。(1028a30f)つまり、そこでは最も十全な仕方で存在しているといえるものが何であるかが探究されている。先行哲学者の見解がZ2で紹介されるが、例えばプラトンは「永遠な存在者」である「イデアと数学的对象」が実体であると主張している。(1028b19f) Z3において、「実体は・・少なくとも四通りの仕方で語られている」と先行学者の諸説をふまえ、実体の候補として「本質と普遍と類、そしてそれらの基体」が挙げられている。(1028b33-36) このことは本質即ち「Xであることは何であったかということ」つまりXそのもの・Xそれ自体は既に普遍や類そしてその基体と共に、その表現様式はともかく端的に存在するものの候補として論じられていたことを示している。先述のように、プラトンはソクラテスの「何であるか？」の探究における「本質」の探究を「受け継ぎ」、「明瞭にはないが、本質すなわち実体について語っている」とされた。(987b4, 988a34-b1) それ故に、実体の探究において、「本質が何であるか、そして本質そのものはそれ自体でいかにあるか」(1037a21)を論じることは中心的な課題となる。

Z4の冒頭で、「われわれはまず「[Xで]あることは何であったか(本質)」についていくつかロギコースに語ろう。即ち本質は自体的に語られるところのそれぞれである」(1029b13f)と語られる時、私はこの手法の採用は「能力の方向」(1004b24)において弁証術的なものではなく、存在主張を導くつまり真偽が成り立つ哲学的な認識に向けられていると解する。そしてここでは『トピカ』以来、本質の「いくつか」の特徴が定義がその定義である事物の一性をめぐって指摘される。彼の本質をめぐるロギコースな存在主張または非存在主張を纏めて見よう。

本質は事物それ自身に即して語られるものであるが、すべて自体的に語られるものが本質ではない。例えば、白と表面は自体的関係である、つまり定

義の構成要素ではあるが、「表面であること」と「白であること」は同一ではない。(1029b17f)表面と白双方の説明言表は同一のものを意味表示することはないからである。また、実体と付帯性の複合体、例えば「白い人間」にも本質は存在しない。その論拠を、まず、「白い人間」とその本質は同じかという視点からなされるZ6の議論から考察しよう。「白い人間と白い人間であることは異なる」とされる。(1031a20f)それは、Bostock (*ad loco*) が指摘するように、帰謬法により論証される。(1)白い人間が白い人間であることと同じであるとしよう。その時、或る人々が主張することであるが、付帯的同一性 (cf.1031a27) として、(2)白い人間と人間は同じであるということそして、明示されていない前提として、(1)に基づき、(3)人間と人間であることは同じであるという見解に立つなら、(4)白い人間であることと人間であることは同じことになる。しかし、(4)は偽であり、それ故に(1)は成立しない。(1031a21-24) というのも、もし(4)が真であるなら、付帯的ではなく、端的な仕方である。「人間」の定義を「二本足の理性的動物」であるとしよう。「白」の定義を「視覚を拡散させる色」であるとしよう。「白い人間」の定義をその二つの合成であるとして、いかなる種類の可知的空間のなかにも連続的に配置することはできないからである。

さらに、「白い人間」に名前「衣」を与え、それを定義すべく説明言表を与えても、余計なものを付加したり、必要なものが提示されずに、定義となる説明言表の形成の困難が指摘される。「衣」を「二本足の理性的動物で視覚を拡散させる色」と定義を試みたところで、名前と説明言表が同一のものを意味表示することはないであろう。定義項そのものが一つのものを意味表示しえないからである。「衣の本質」は何物の本質でもない可能性がある。というのも「或るものの本質は、そのものがまさにそれであるところのそれ」(1030a3) であり、複合体は「これ」という仕方で指示されるものではないからである。同様に、例えば動物における雌のような自体的属性にも本質ここでは「まさに雌であるところのもの」は存在しない。動物なしに雌を「表示すること」(1030b24) はできないからである。「雌」という名前は「これ」という仕

方で「雌」を指示することはできず、複合的なものを指示する。これは「シモン」という複合名と同質である。「シモン」は「鼻における凹み」のことであるが、この定義を試みる時、その説明言表は「鼻における凹み」であり、被定義項のなかに、既に定義項が実質上含まれその説明言表は定義としての資格を持たない。また「シモンの鼻」と言うことはできないか、もしそれに説明言表があるとしてそれは「凹める鼻なる鼻」という仕方で無限遡及し、「複合体に本質が存在することは不条理である」(1030b34f)ということになる。実体だけが「まさにこれであるもの」(1030a5)であり、端的に定義があるところのものである。

名前と説明言表が同一なものを意味表示すれば定義となるのではなく、その説明言表が「一なるものについてある場合に」定義となる。(1030b9) 人工的に名前をつくり、その説明言表を作れば、定義が成立するのではない。例えば『イリアス』全24巻の語句全体に「イリアス」という名前を与えても、その全文章が「イリアス」の定義としての説明言表になるわけではない。(1030a7-9, 1030b9) 全文章の単なる「連続」(1030b9)や「結合」(1030b9f)においてある『イリアス』は人為的な一性であり、一つのもを意味表示することはない。『イリアス』の全語句が「これ」という仕方で指示される一なるものとは言えない。せいぜい人工的に一なるものである。世界の側で「これ」という仕方で指示される一なるものがあることが、定義成功の前提条件である。そのことから「従って、いやしくも「これ」が実体にもみあるのであるなら、本質はその説明言表が定義であるものについてある」(1030a6f)が導かれる。

とはいえ、存在が多くの仕方で語られるように「一なるものも同様に語られる」。(1030b10f) アリストテレスはZ4-6においても、類種系列において定義を理解しているが、彼は「類の種にのみ」本質があるのか、「それとも」(1030a17)「定義」という語についても「何であるか」と同様に多くの仕方でも語られるのかを問う。(1030a11-18) その応答は、実体の持つ一性の故に、端的には本質は実体にあるが、その「一なるものとの関連において」(1030b3) 所謂帰一的・派生的な仕方でも他の範疇に属するものにも、本質があると譲歩

される。そこから「かくして、定義は本質の説明言表であり、そして本質は端的には実体にのみ、或るいは少なくとも最も主なる第一義的な意味では、実体にのみあること明らかである」が導かれる。(1031a11-14)

これまで明らかにされたことから言えば、「Xであることは何であったかということ」は、端的に一なる実体Xにあるということである。ここで、本質が実体に「ある」と言っても、それはいかなる仕方で「ある」のかが問われる。端的に一なるものと語りうる実体はいかなるものか。定義によりまさにそれであるところのものが明らかにされる一なる本質が実体であるという仕方で、実体にあるのか。それとも実体の根拠として内在し、より一層実体であるのか。実体と本質の関係はいかなるものなのかが問われる。そのことは、「自らの実体とは別のものであるとは思われていないそれぞれ」と「それぞれの実体であると語られている本質」について、「本質とそれぞれははたして同一なのか異なるのか」という仕方で問われる。(1031a15-18) ここで「それぞれ」という用語の選択は注意深いものであり、可能な存在者すべてを表現しうる。

Z6においては、それぞれと本質の非絶縁性のロギコースな主張が中心적であると思われる。ここでは、自体的に語られ、そしてそれより先に実体がないそのような基礎的な実体が考察される。プラトニストはアイデアがそのような条件を満たすと主張するが、アリストテレスはそれを事例とし、それぞれと本質が「絶縁されている」(1031b3)とするなら、生じるであろう様々な不条理なことがらを挙げ、「自体的に語られかつ第一のもの」はその本質と同一であることをロギコースに論じている。

もしそれら [例えば、善それ自体と善であること] が相互に絶縁されているなら、一方のものども [例えば、善それ自体] については知識が成立せず、他方のものども [例えば、善であること] は存在することはないであろう。私が「絶縁されている」と言うのは、善それ自体に善であることが属さず、善であることに善であるものが属さない場合という意味である。というのも、それぞれの知識は、かのものの本質をわれわれが知る時に、成立するか

らである。また、善と他のものどもについても同様であり、従ってもし善であることが善でないならば、存在であることは存在ではなく、一であることは一でない。同様に、本質はすべて存在するかあるいは何も存在しないかであり、従ってもし存在することが存在しないならば、他のものどもについても本質は何もないであろう。・・従って、善と善であることそして美と美であること、また他のものについて語られず、自体的に語られかつ第一のものどもが一なるものであること必然である。(1031a28-b14)

それぞれとその本質が絶縁されているならば、(1)事物を知るということは、その本質を知ることであるから、それぞれを知ることができない。さらに、(2)存在者の本質は、絶縁されているなら、存在しないことになる。それ故、善の本質も善でなくなると同時に存在しないことになる。これらの不条理からの帰結として、自体的に語られ、それよりも先なる実体が存在しないという仕方では第一のものどもの場合には、それぞれとその本質は「一なるもの」(1031b12) でなければならないということがロギコースに導かれる。

最も基礎的な実体を基準にした、この非絶縁性の導出は一性の議論にとって根源的である。本質というものは、もし存在するなら、それぞれと内的な関係にあり、事物の一性のあるところ、その本質の一性があることが論証されている。彼は「必然的に、善と善であることそして美と美であることは一なるものであり、また、他のものについて語られず、自体的に語られそして第一のものどもは何であれ一なるものである。というのも、そのものが存在すれば、もしたとえそれがアイデアでなくとも、あるいはむしろ、それがアイデアであっても、十分だからである」(1031b11-15)と述べ、ロギコースに結論づけられた存在者は現実世界のなにものかによって満たされるべき条件として機能している。Z6においては「第一のものであり自体的に語られるものども」(1032a5, 1031b13f)ということで、いかなる存在者が理解されるべきかは問題とされない。何であれそのような存在者はその本質と最も厳密な意味で同一であることが論じられている。そうであるとすれば、「かくして、いかなる仕方ではそれぞれと本質は同一でありまたいかなる仕方でも同一でないか

が語られた」(1032a10f)とその章が結論される時、その答えは「第一のものであり自体的に語られるものども」の場合に、その非絶縁性の故に同一であり、それ以外の付帯的なものや複合的なものどもの場合には異なる、またはかの第一のものの派生的な仕方でのみ同一であると理解されるべきである⁽³⁷⁾。

9

以上がZ4-6でロギコースに、つまり現実世界への参照なしに論じられる本質の諸特徴である。これらのロギコースな議論から、先(7節)のアポリアを解決することができる。形相は質料の根拠として、つまり質料を秩序づける最も先なる事物の構成要素として本質と同定されるのではない。形相はそれ自身として「第一のものであり自体的に語られるもの」であるが故に、端的な一性を実現しており、自体的同一性を表現している本質と同定される。『トピカ』の主題である種は類と種差によりその本質を意味表示する説明言表を得るとされた。そのさい種は、形相がそれ自体として一なるものであるそのような仕方においては、一なるものであるが故に、その類と種差によりその本質が意味表示されるというべきである。さらには、種の例化である個体、例えばカリアスも一なるものであるが故に、彼に本質が帰属する。(1022a27)しかし、端的に一なるものは「質料なしの」(1032b14)形相であり、本質は第一義的に形相に帰属される。これが「本質は第一にそして端的に実体に属するであろう」(1030a29f)と言われる由縁である。そしてここで実体とは「第一に存在するもの・端的に存在するもの」(1028a30f)のことである。このことは本質がただちに因果論的な構造のなかで議論されているわけではないことを示している。あるいは、形相は少なくとも、「本質すなわち形相そのものが自体的にある」(1037a1f)という仕方、因果論的文脈とは異なる文脈において論じられうるものであると語ることができよう。非絶縁的で端的に一なる事物とその本質が一なる実体であるというロギコースな議論は、ピュシコースな探究の制約ないし条件を提供する。

ひとつには、認識論的な条件として本質は機能する。本質は非絶縁的なものとして事物の認識を可能にさせるということが主張された。語彙集における「限界」の項目で「本質は認識の限界である。もしそれが認識の限界であるなら、事物の限界でもある」と述べられている。(1022a9f) これも認識の可能性に関するロギコースな議論からの、存在主張である。さらに、認識を可能にさせる本質は不可分な存在であるとされる。その論拠は「本質はその説明言表の部分を多くすることによって他の定義に還元することはできない」からである。(994b16-18) 無限に分析可能であるとするひとは認識を否定している。というのも、「不可分なものに達しない限り知ることは不可能」だからとロギコースに論じられる。(994b21f) 説明言表は可分割であるが、それが意味表示・指示する本質は不可分なものでなければ、事物は一性を持ちえず無限遡及となり認識は成立しない。(cf.1016a32-35)

一なる事物があるところ、そこには一なる本質があるということが、事物とその本質の非絶縁性からロギコースに要請される。「一つの実体すなわち一つの本質があるところのものどもは、それら自身一つである」。(1038b14f) さらに「カリアスは彼自身に即してカリアスである、すなわちカリアスであることは何であったかということである」(1022a26f) というトートロジー言明における「すなわち」も、この非絶縁性に基づくものであると言える。しかし、このようなロギコースな存在要請はそのものとしては内容空疎である。このような言明を繰り返し、実体を分節できない限り、探究は進まない。「何故に同じものは同じものかと問うことは、何も探究していないことである」。(1041a14f) アリストテレスの質料形相論はこの一なる事物と本質の分節の試みなのである。或るいは、いかなる仕方でも事物が一なるものであるかを説明する試みであり、本質はそのさい質料形相論が開示する究極目標となる。こうして今や「形相は本質のロゴス(説明するもの)である」(1013a27, 194b27) と言われる意味を理解することができる。そのような一なる事物をロゴス化し分節することにより理解可能なものにすもの、それが形相である。アリストテレスは論証理論に基づく説明論的アプローチにより、分割法のなしえない「何故に、その説明言表が一なるものであるもの、例えば人間につ

いて二本足の動物、が定義であるとわれわれは主張するのか」(1037b11f)に答えるべく、質料形相論を展開する。

質料形相論の展開は本稿で取り組むことはできないが、ただ本質論と質料形相論の次元の差異だけを、最後に確認しよう。アカデメイアにおける現用言語の代表である類と種差による事物 X の定義の形成により意味表示されるものは、ロギコースには X そのもの或るいはまさに X であるところのものと言われるものであった。「本質」はロギコースにはトートロジー言明以上に語りえないものであった。一なる事物があるところ、そこには一なる不可分の本質も存在することがロギコースに要請されるそのような存在であり、それ自身因果論的に論じられうるものではない。しかし、現実世界の事物・事象の観察を通じて、ピュシコースにその根拠の探究という仕方でも事物・事象の説明言表を形成する次元においては、形相は他の三つの根拠と共同して、事物・事象 X そのもののロゴスとしてその分節を請け負う。これが「形相が本質のロゴス」と言われる実質内容である。本質はそのロゴス(説明)である形相において、説明論的アプローチという仕方でも因果論的構造のなかに組み込まれうる。

また、本質は不可分な存在としてロギコースに主張されるとして、その認識は説明論的アプローチを取り形相として把握されるということできなければ、帰納の終局として事実上「観取するかしないか」「触れる・触れない」のいずれかという仕方でもヌースの対象となる。(1051b24f, b32, 430b27-30, cf.100b4 ff)「何であるか?」の探究と「何故に?」の探究はこのように相補的なものであると言える。

かくして、例えば、Frede & Patzig がこの成句の解説のさいに、「これであることは何であるかと言うこと [本質] は、例えば、人間を人間にするもの、家を家にするものを意味しているという仕方でも、理解されねばならない」と、因果的な役割をすでに使役的にこの表現のなかに担わせていることは誤りであると言わねばならない⁽³⁸⁾。上述のように、ロギコースな存在探究においては、因果論的説明構造のなかで本質が果たす役割を見い出すことはできない。この成句の言語表現のなかに使役的な意味を読みとることはできない。

そして、アリストテレスの Corpus 全体においても、本質という言葉表現は術語として「まさにそれであるところのもの」としての自体的同一性を意味していることは語りうる一つの確実なことである。

結 論

アリストテレスはソクラテスの問答実践の対象を継承しその方法を弁証術として体系化した。そこでは「何であるか？」を直接問うことなしに、プレディカビリヤを基にした問題を提示し、あらゆるものごとを吟味し、さらに「何であるか？」の探究に有益な命題の確立と覆えしの技術を展開している。アカデメイアにおける現用言語の規範性を基礎に、類種の可知性の構図のなかでサンプルの帰納を通じて、本質は類と種差による固有定義により意味表示されるものである。「本質」という表現はソクラテスが問答において求めた、探究の対象 X それ自体を表現すべく導入された。それは「何であるか？」の問いにおいて、事例による応答がそれにより問われているのではないという新しい事実に気づき、問い直すという問答の現場において用いられる弁証術的用法と言える未完了過去形により構成され、「X であることはいったい何であったか？」という疑問文の言語構造を持つものである。

あらゆるものごとを吟味する弁証術の文脈において、命題の確立と覆えしの道具として導入されたプレディカビリヤのひとつである本質は、『形而上学』においては、弁証術と形而上学に通底する手法であるロギコースにより、その存在が主張されている。事物とその本質が絶縁されているならば、事物の認識は可能ではなく、またそれが一なるものであるとも語りえない。その議論に基づき、本質は「まさにそれであるところのもの」というトートロジー言明により表現される。その可知的空間は分割に基づいた「何であるか？」の問いに対する応答である定義論のもとにあるアカデメイアにおける通念の空間であり、現実世界への参照をもとに因果構造に関与して「何故に？」という問いのもとに科学的知識を獲得する論証に基づいた定義論とは異なる。このロギコースな存在主張はピュシコースな探究の目標となり、「何である

か？」の探究と「何故に？」の探究は相補的である。われわれはこれらの成果のもとに『形而上学』を新たに読み直さねばならない。

注

- (1) この点については、拙稿「アリストテレスの本質主義 ―必然性の源泉としての本質―」『北海道大学文学部紀要』45-3 No.90 1997 を参照されたい。
- (2) R.Sorabji は「本質 essence」の表現としてこれら三つを挙げる。essence はラテン語の essentia をもとにしており、essentia は esse の派生語であることから、Sorabji は「本質」に対するこれらの言及の様式は、事物の本質は単にそれが何であるかということではなく、事物がそのまさに存在をそれに依存させているところの何ものかのことである。換言すれば、それが必然的にある何ものかである」(p.213)と存在の根拠という仕方です。「形而上学的に負荷をかけられた」(p.213)解釈を提供している。R. Sorabji, *Necessity, Cause, and Blame Perspectives on Aristotle's theory*, 1980 London.
- (3) アンチステネスは λόγος を規定するさいに “ὁ τὸ τί ἦν, ἢ ἐστίν, ὁῦλον” としていることが報告されている。D. Ross, *Aristotle's Metaphysics I*, P.127. D. Bostock は本質は「アリストテレス自身の発明」であるとしている。D. Bostock, *Aristotle's Metaphysics Books Z and H*, p.86, 1994. G. E. M. Anscombe は「アリストテレスの学校において術語として通常の使用のうちにあった」としている。G. E. M Anscombe and P. Geach, *Three Philosophers, Aristotle, Aquinas, Frege*, p.24, 1967.
- (4) M. Loux は「本質という表現の起源に関し文献上多くの議論がある」として諸文献を指示したうえで、「その表現のいかなる説明も推測的である」としている。M. Loux, *Primary Ousia An Essay on Aristotle's Metaphysics Z and H*, p.73f.n.5. 例えば、J. D. G. Evans が本質は「第三人間論のパラドックスを回避すべく、通常の “τί ἐστίν” の代用をする新奇な定式」であると主張するが、これは全く根拠のない「推測」の一例である。J. D. G. Evans, *Aristotle's Concept of Dialectic*, p.112, 1977. 他の推測に関しては 6 節における本質の言語構造の分析における、諸見解の対立を参照されたい。私は本稿において本質の術語化の現場をおさえることにより、その文脈からこの表現の推測的ではない解釈を提供したい。その試みがなされなかったために、本質の術語としての文脈を無視して解釈されることが多い。例えば、Ross は「ロゴスと本質は常に形相と同義なものとして用いられる」と述べている。(Aristotle, p.74,1923) S. Mansion も「アリストテレスにおいては、しばしば、実際的にはロゴス、形相、本質、ウーシアとう用語を同義に使用するということが生じる・・・」と述べ、本質の独自性を摘出し損ねている。La notion de matière en Métaphysique Z 10 et 11., *Étude Sur La Métaphysique D' Aristote*, p.188, 1979 Paris. また M. Matthen は「アリストテレスの本質を因果的役割

に適應させることのできる本質の理論のための存在論上の枠組みを提示することが目標である」論文のなかで、最初に次のように断わっている。「アリストテレスは本質ないし形相を「何であるかということ $\tau\omicron\ \tau\acute{\iota}\ \epsilon\acute{\sigma}\tau\acute{\iota}$ 」, 「あることは何であったかということ (本質)」, 「形相」, 「説明」そして「実体」といろいろに呼んでいる。これらの用語の使用におけるいかなる差異も私の現在の目的にとって無関係である」(p.151 n.2) と述べている。このような把握でアリストテレスの本質の因果的役割をめぐる思索を正確に捕えることは不可能であろう。Individual Substances as Hylomorphic Complexes, p.151 *Aristotle Today Essays on Aristotle's Idea of Science*, ed. M. Matthen. 1987.

- (5) Bonitz の引用に関しては C. Arpe, *Das $\tau\acute{\iota}\ \eta\upsilon\ \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ bei Aristoteles*, S. 7, 1938. Arpe はそこで「かつてボーニッツがアリストテレス哲学の心と呼んだ本質の分析に関して、われわれはこの哲学の最も困難な部分に向かう」と述べている。『トピカ』の最近の注解については, R. Smith, *Aristotle Topics Books I and VIII*, Oxford 1997. そこで Smith は「アリストテレスの「事物の本質は何であるか?」 また「何が本質を持つのか?」 という問いに対するアリストテレスの答えはアリストテレス研究において最も困難で争われた論点に属する」(p.60) と述べている。なお, G. E. M. Anscombe は「それら(「本質」や「・・・であること」) が何を意味すべく, いかにそれらが機能すべくまたきわめて一般的に, それらのポイントが何であるべく想定されているかを心に決めることなしに, ひとはアリストテレスを理解することを望むことはできない」と述べている。G. E. M. Anscombe and P. Geach, *ibid.*, p.24, 1967.
- (6) ログイコスとは通常ピュシコスという探究方法と対比されるが, 相補的でありうる。本稿で論じることのできないピュシコスな手法は, 基本的に, 自然学者が現実世界の観察のもとに事象の根拠を探究する方法である。「根拠は四つあるから, これらすべてについて知ることは自然学者のなすべきことであり, そして彼は「何故にか?」をこれらすべて, つまり質料, 形相, 始動因, 目的因に帰着させ, ピュシコスに説明するであろう」。(198a22f) これは自然学者の研究目標を述べた箇所である。この手法は自然学者をして事実の観察に基づき, 論証理論に基づく説明論的アプローチによりその事実の「何故にか?」を説明させ, 根拠を根拠として自然学的に把握させる。(e.g. 748a7ff, 280a32, 283b17, 298b18, 304a25) 拙論「アリストテレス哲学における方法論 ―形而上学の可能性を開くもの―」『ギリシア・中世哲学研究の現在』哲学会編『哲学雑誌』113 巻 785 号, 1998 参照。
- (7) 「あらゆるものごと」を原理的にその対象とし, あらゆる命題の吟味をその中心的な役割とする弁証術がその独自の存在理由を持つことは, specialist と generalist の対比という今日的観点からしてもうなづけることである。それをアリストテレス流に言えば, この術のめざすものは教養ある人をつくることである。彼は「教養のある人は, 専門的学識はなくとも, 話し手の説明の中のどこが正当で, どこが不当であるかを適切に判断することができる。・・・このような人だけが, 単独で, いわばあらゆるものごとについて

- の一種の批判者なのである」(689a5-10)と述べている。
- (8) Ryle はプラトン自身は争論術を若い人々に禁じながらも(『国家』7巻537f), イソクラテスが Antidosis258-69 において, アカデメイアでは「争論術」が教えられていたと報告している。ライルはプラトンがその教授にアリストテレスが携わることを是認し, 争論術が彼の弁証術にあたると興味深い推測をしている。G. Ryle *Plato's Progress* 108f, Cambridge, 1966.
- (9) cf. J. Barnes, Proof and the Syllogism, *Aristotle on Science The "Posterior Analytics"* p.46. n48, 1981.
- (10) J. D. G. Evans, *ibid.*, p.7, 1977. Ryle, *ibid.*, p.126f プラトンの『国家』において, 弁証術は, 「ひとは問答することによって, いかなる感覚にも頼ることなく, ただロゴスを用いて, まさにそれぞれであるところのものへと前進しようと努める」(532a-b) 営みであり, また「弁証家と呼ぶのはそれぞれの実体を説明するロゴスを把握する者」(534b) のことである。弁証術が「真理を伴侶にして存在そのものに至る」(537d) とも形容される時, 生成世界から永遠な存在の世界へ探究を可能にさせ, そしてその知識を獲得させる最も高貴な知的探究の形式であった。(後期の『ピレボス』においても同様 55d-59e)。
- (11) G. Ryle, *ibid.*, p.127.
- (12) 拙稿「アリストテレスの三段論法の起源(1)―論理学の形成過程をめぐって―」p.34, 三田哲学会『哲学』No.79 1984 参照。cf. Evans, *ibid.*, p.4
- (13) 他方, 演繹的な弁証術的推論は反論する者に対しては帰納より「一層強圧的で効果がある」とされる。(105a16-19)
- (14) 「帰納」ということでアリストテレスは必ずしも観察的事実の枚挙を意味しておらず, 概念分析による語の使用の文脈の枚挙を意味することもある。例えば他のものないし自らの「うちにἐν」という語を「帰納により考察する」際, それは語の意味の多様な使用の枚挙であるが, Owen はそれを「弁証術的な調査」と表現している。G. Owen *Tithenai ta phainomena* p.241 *Logic, Science and Dialectic* 1986, cf.210b8-9.
- (15) 類と付帯性は他の箇所, 「事物と相互に述語づけられない場合, 基体の定義において語られるものどものうちにある[類] かあらぬ[付帯性] か」という仕方に対比されている。(103b12-14)
- (16) 一般的な次元で本質が論じられる時, 対象 X は「定義されるもの」(eg. 139a35) と「それぞれ」(eg. 1029b20) という中立的な表現が代入されているが, これも本質という表現がクロスカテゴリーな概念であることの現われである。それ故に, 実体範疇における本質を意味する場合には「本質つまり実体」という仕方の説明される場合がしばしば生じる。(eg. 91b 9, 642a26, 1038b14, 1075a2) そこでは, 結合体であれ, 非結合体であれ, 実体範疇に属するいずれの存在者についても本質を語ることが可能であることを示し, 形而上学構築の一つの足場を提供している。
- 『トピカ』において「雪」「スワン」や「魂」等が「ウーシア(実体)」であるとされ基

体の機能を担う。(120b38, 151b1) 他方、実体の説明言表が「何であるか」を意味表示する時、それは定義となるが、その実体述語は「ウーシア」ないし「何であるか」と双方が互換しうるものとして語られている。(103b28, 31) 「ウーシア」が事物・主語と何であるか・述語双方に用いられる。それは、定義が成立している時、例えば、基体・主語である「魂」という名前とその述語である説明言表「自分で自分を動かすもの」(140b3) が同一のものを付帯的でなく意味表示するが故にである。(cf. 93b36f) 範疇との関連でプレディカビリアが枚举される時 (103b24), 「固有定義 (ὁρος)」のかわりに「定義 (ὁρισμός)」が用いられるが、「固有定義」という表現が用いられないのはこの箇所だけである。クロスカテゴリーアルつまり実体にも性質等にも「何であるか」が語られる範疇の文脈においては (103b27ff), 一般的な「定義」が使用されている。このことは固有定義が基本的には実体範疇に割り当てられていることを示唆するが、『トピカ』においてはこの問題はこれ以上追及されない。(cf. 1030b5) ウーシアが何であるかの探究は『形而上学』に委ねられているため、ここで「ウーシア」の指示を特定することは求められていない。そのため、「ウーシア」がルースな仕方で使用されているとしても非難されるべきことではない。

(17) 「構成要素」とは厳密には類と固有性に関するトポスが固有定義に関するトポスの「構成要素」であるとされている。(120b11-12) しかし、固有定義が類と種差により構成されるものである以上、このトポスの構成要素の下に類と固有性が固有定義の構成要素であるとアリストテレスは解していたに違いない。Alexander も「類と固有性は定義の構成要素であるので(というのも、定義はそれらを持たねばならないから)、これらも正当に定義に関する諸トポスの構成要素であると語りうる」と述べている。Alexander *Aphrodisias in Aristotelis Topiconum Libros Octo Commentaria* ed. M. Wallies, p. 296, Berlin, 1891.

(18) Alexander はこのソクラテス批判はアリストテレスの弁証術と論証科学の間の区別をめぐる構想に依拠していると解している。「定義は、論証の書において示されているように、推論と論証の原理であるので、ソクラテスは推論することを求め、何であるかと定義を求めたことには道理がある。定義なしに推論はあるので (弁証術的推論はすべてそのようなものであるが、幾何学者や他の人々がそうするように、定義を把握することは論証的に証明することに属する), アリストテレスは弁証術がその当時、何であるかつまり定義なしに同じものについて、例えば快樂は善であると、逆に快樂は悪であるという場合のように、対立するものを推論できるほど力強いものではなかったということを導いた」。(718, 4-11) Alexander *Aphrodisias in Aristotelis Metaphysica Commentaria* ed. M. Hayduck, p. 741, Berlin, 1891. 要するに、ソクラテスは幾何学者が行う厳密な何であるかによる論証を求めたが、弁証術的推論については、それを作ることができなかったという批判である。

尚、N. Gulley は Alexander のこの一文を次のように解釈している。「ソクラテスは定

義することに集中し、「あらゆるものごとの定義」を求めた。なぜなら当時の弁証術の力の欠如は定義とは独立に弁証術的推論というたぐいの推論を、即ち、単に蓋然的な前提のみを用いる推論を用いることを不可能なものとしていたからである。それ故に、ソクラテスは「幾何学者や他の人々」により使われた方法、即ち定義である第一原理に基づき科学的論証の方法を選択した」(p.5)しかし、ソクラテスの「何であるか」の探究は帰納に基づく普遍的定義の追及とそれを基にして、対立するものを「考察すること」(1078b26)であった。彼は「推論することを求めた」(1078b24)と言われるが、アリストテレスがソクラテスの問答実践を推論化と解したのであって、ソクラテスが推論や論証の理論の下にそれを実践したということではない。実際には、彼の「何であるか？」の探究はアポリアに終わり、その下に推論を施すにまで至らなかった。ソクラテスは帰納に基づく問答により「何であるか？」に関して同意を引き出すことに務めたのであって、問答を前提にしない強制的な力を持つ論証を試みてはいない。少なくとも、「何であるか」を前提に論証を試み、対立するものに必然的な知識を求めたということをこの箇所から主張することはできない。弁証術そのものの方法としての力不足が指摘されているのであって、ソクラテスが持っていないかった論証理論との対比を持ち出すことはアナクロニズムである。(987b2 ff, 642a27ff) N. Gulley, *The Philosophy of Socrates*, Macmillan 1968.

- (19) アリストテレスはトポス論の導入部である第1巻で、議論を作る能力としての「道具」を挙げている。「それによってわれわれが推論に対処する道具は四つある。(a)一つは命題を得ること、(b)第二はそれぞれの語がどれだけの仕方で語られるかを分析する能力を得ること、(c)第三は種差を発見することそして(d)第四は類似なもの探究である」(105a21-25)。以上が推論を行うさいの道具であるが、1巻の終わりで、推論に役立つ「もろもろのトポスは次のものである」(108b33)とし、2巻以降プレディカビリアをめぐるトポス論に議論が繋がられている。このように弁証術は基本的に帰納法とそれを前提する分割法を基にして「何であるか」の探究のトポス論を展開する。従って、ソクラテス以来の弁証術を彼はプレディカビリアをめぐるトポス論として展開させたと言うことができる。その意味で、『トピカ』全体がソクラテスの定義探究の方法化であると言える。アリストテレスのこの企ての理解には、先述のように、四つのプレディカビリア「すべては定義的なものであることになろう」(102b34)が鍵となるが、このことは正しく理解されてこなかったように思われる。

最近の『トピカ』の注解において、R. Smith は「定義的」をめぐる1巻6章について次のように述べている。「その内容は奇妙である。第一に、アリストテレスは実際すべての「問題」を定義的と呼ぶことができると論じている。次に、彼はこれは一つの方法を求める理由ではないと、その方法が持つであろうわかりにくさと不都合さを引きあいだして、言っている。そしてそれから、彼はまさにその理由により、われわれは、ちょうど先に言われたように (101a18-24)、最もふさわしい仕方、概略的な分割を用いる

べきでありそして「残されているもの」をそれぞれの下位分割に割り当てるべきであると結論づけている。R. Smith, *ibid.*, p.67.

この章には何ら「奇妙」なところはない。第一の「奇妙」さについて言えば、既に述べたように、問題は「何であるか？」を直接問わずに、「何であるか？」の応答となりうるものの分類であるために、定義的と言われる。私は、第二の「奇妙」さに関して、Smithと異なるテキストの読みをする。アリストテレスは「・・・枚挙されたものすべては、何らかの仕方、定義的なものであることになろう。しかし、このことの故に($\delta\iota\alpha\ \tau\omicron\upsilon\tau\omicron$)、あらゆるものについて普遍的な一つの方法を求めるべき($\xi\eta\tau\eta\tau\epsilon\omicron\nu$)ではない。」と述べている。(102b34-36)ここではSmithが解するように、「求めるべきではない」という否定命令の理由としてすべてが定義的であることが挙げられているのではない。私は、定義的であるからと言って、一つの方法を求める、ということになってはならないと言われていると解する。否定は文全体を支配しており、「このことの故に」は否定の理由ではない。つまり「故に」は「求めるべき」にかかっている。ここでは「何であるか？」という定義を求める問いの形式により、普遍的な一つの方法を求めたソクラテスが批判されているのである。第三の「奇妙」さも、実はソクラテス批判であると解する時、何ら奇妙なものとはならない。上記の引用に続いて、「というのも、それを見い出すことは容易ではないからである。もしそれが見い出されたにしても、当該の企てに対してまったく不明瞭で役に立たないであろう」(103a36-38)と言われている。ここでもプレディカビアの下に分節して探究することのない、ソクラテスの一つの普遍的方法は役に立たないものであると批判されているのである。

このようにソクラテス的探求の展開であるプレディカビアをめぐるトpos論は帰納法を前提にした分割法により展開されるが、これら道具の概略は(a)は1巻14章で(b)15章で(c)は16章および18章で(d)は17章18章で論じられている。

(a)に関して14章において命題と問題の部分は「おおよそ」三種類であり、それは「倫理的」か、「自然学的」か「論理的」かに分類される。(105b19-21)弁証術が扱う対象が「あらゆるものごと」(1004b20)であるとするなら、この三種類によりおおよそ議論の対象となることは尽くされる言うべきであろう。すべての対象についての命題・問題が先のプレディカビアのいずれかを意味表示しているとされる。ただしすべての問題を吟味する必要はなく、むしろ「神は敬うべきか、否か」に当惑する人には「懲罰」が必要であり、「雪は白いか、否か」に当惑している人には「知覚」が必要であるとされる。(105a2-7)ここに問答ないし弁証術というものの対話の相手次第という ad hoc な状況が見られる。実際、『トピカ』の論述には非学問的な「いらいら」、「腹をたてる」、「気むずかしさ」、「臆する」、「無駄口」、「粉飾」、「せっかち」また「有利と考えられるように」という類の言論につきまとう様々な要素が考慮されている。(112a12, 161a23, 160b2ff, 160a21, 158a28, 157a6, 163b19, 142a13, 15)そのため、弁証術においてそれが言論をめぐるものである以上、対話者間の心理状況、社会状況など所謂語用論また対人論法の

問題を回避できないが、『トピカ』において複雑で多様な言論一般についての理論を構築することはめざされていない。弁証術の目標は対話の訓練かそれとも哲学的な知識に有用となることである以上、その目的に応じて考慮すべきことが異なってくると言える。後者のためには先の語用論的、対人論法的な要素は比較的無視しえうと言えよう。

- (20) J. D. G. Evans の *Aristotle's Concept of Dialectic* の中心的な主張は非科学的な実践である弁証術の「存在論的中立性」である。(p.17, cf. p.26-28) しかし、定義制約を提示させるものはアリストテレスの信念の次元における存在論的なコミットメントである。このような関与を前提にしても、命題の確立と覆えしの双方を試みるのは知的な訓練という弁証術の一つの目標・特徴の故にであり、哲学的な知識獲得に有益となるもう一つの特徴は存在論的に中立であるわけではない。
- (21) 帰納そしてその一つの活動であるヌースが「事実上」根拠を把握することができるにしても、それは根拠を根拠「として」把握することとは異なるということについては、拙論 “Aristotle on Explanation — Demonstrative Science and Scientific Inquiry —” ch.6 Induction and *νοῦς* 参照されたい。『北海道大学文学部紀要』40-2, pp.52 ff, 1992.
- (22) 注(4)参照。
- (23) D. Ross, *ibid.*, p.127.
- (24) H. W. Smyth, *Greek Grammar*, p.341, 1980. H. Weidemann, In Defence of Aristotle's Theory of Predication, p.77, *Phronesis*, 1980.
- (25) Frede & Patzig, *ibid.*, I, S.19, II, S.34f. Arpe は $\tau\acute{\omega}$ ἀνθρώπῳ εἶναι に関する理解として「内的な本質」(Trendelenburg), 「人間にとっての固有の存在」(Zeller), 「抽象的な概念形式を通じて思考されたものの εἶναι による結合」(Ueberweg-Heinze) という諸説を紹介している。彼は抽象的な概念形式という理解に対し異義を申し立てている。「しかし、アリストテレスは「誰にとって!？」の人間存在であるかについて不明瞭に語ってはならず、人間の人間存在についてまったくはっきりと規定している。誤解に負けないためには、 $\tau\acute{\omega}$ ἀνθρώπῳ εἶναι という形式において、もうひとつ第二の与格を思想上補うとよい」(Arpe, *ibid.*, S.18)として、この成句に補いを薦める。Frede & Patzig はこの解釈に従っている。M. T. Liske は「同化作用」によりひとつの与格になった可能性に言及している。M. T. Liske, *Aristoteles und der aristotelische Essentialismus*, S. 264, 1985, Alber. これらの解釈は本質がその本質である対象 X が本来は二度与格で表現されていたという主張である。
- (26) Arpe, *ibid.*, S. 15. W. Mesch もこの未完了過去に関して「既に議論されないし確認されたものに対するギリシア語においてはありふれた再帰的参照である」とするが、これが疑問詞に支配されていることを考慮していない。Walter Mesch, *Ontologie und Dialektik bei Aristoteles*, S. 163, 1994.
- (27) J. Owens, *The Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics*, p.183, 1963. Arpe, *ibid.*, S. 15, B. 16, Ross, *ibid.*, p.127. 角田幸彦は Owens に同意し「正しい方法とは、な

ぜアリストテレスの説く形相がその特殊な無時間的本性を表現するために不完了を必要としなければならなかったかを発見しようとする意図をもって、アリストテレスの説く形相を吟味してみることにある」と述べる。このように、本質の使用される文脈を形相と癒着させて理解されることがしばしば見られる。『アリストテレス実体論研究』p. 83, 1998, 北樹出版。

- (28) Arpe, *ibid*, S.17.
- (29) Ross, *ibid*, p.127. D. W. Hamlyn, *Aristotle's De Anima Books II, III*, p.86, 1968.
- (30) Ross, *ibid*, p.127. Frede & Patzig は哲学的未完了過去であると解する。Frede & Patzig, *ibid I*, S. 19. Weidemann もそれが E. Buchanan の主張であるとして紹介し同意している。(ibid, p.77) E. Buchanan, *Aristotle's Theory of Being*, p.30, (Greek, Byzantine Monographs 2), 1962.
- (31) ただし、この箇所は一般的に付帯性の定義を求めている文脈で、付帯性を他のプレディカピリアでないものという仕方での相関的な定義が提示された後に、付帯性がそれ自体としていったい何であるかを問うている。それ故に問答の現場における問いではないので未完了過去は用いられていない。
- (32) W. Goodwin, *Syntax of The Moods and Tenses of The Greek Verb*, p.13, 1929, London.
- (33) Liddle & Scott, *Greek English Lexicon*, ad. loco, Ninth Edition, 1996 Oxford.
- (34) Goodwin はアリストファネスの『鳥』279 行にこの $\hat{\eta}\nu$ の用法が疑問文で見られるとする。そこでは「いったいこの怪物は何であるのか？それでは君ひとりが戴勝鳥だったのではなく ($\omicron\upsilon\ \sigma\upsilon\ \mu\omicron\nu\omicron\varsigma\ \acute{\alpha}\rho\ \hat{\eta}\sigma\theta'$)、もう一羽いるのかね？」という疑問文において $\acute{\alpha}\rho\ \hat{\eta}\nu$ が用いられている。これは別の一羽が対話している者のところに現われ、対話者の一人ピステタイロスがあげた驚きと疑問の声である。一羽だけが戴勝鳥であると思っていたところ、他の一羽がきて、見過ごされていたものを発見し、先の一羽がここでは問い直されている。Goodwin, *ibid*, p.13.
- (35) J. W. Donaldson は「 $\hat{\eta}\nu\ \acute{\alpha}\rho\alpha$ は $\tau\omicron\ \tau\acute{\iota}\ \hat{\eta}\nu\ \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$ の組み合わせにより例証されるかもしれない」と指摘している。The New Cratylus, p.335, 1850, London.
- (36) M. Loux は「私は与格における表現は述語的主格として翻訳しないという私の提案において主流に反することになる」(*ibid.*, p.73. n 5) として、G. E. Anscombe 等の通常の解釈に反対し、E. Buchanan や H. Weidemann に賛成している。
- (37) 私のこの Z 6 の結論の一文「かくして、いかなる仕方ですれぞれと本質は同一でありまたいかなる仕方ですれぞれと同一でないかが語られた」(1032a10f) に対する解釈は Ross, Frede & Patzig そして Bostock 等の解釈と異なる。彼等の解釈は名前の二重に意味表示することに注目し、例えば名前「ソクラテス」(1032a8) が全合成体ソクラテスを意味表示するのなら、その本質「ソクラテスであること」と同一ではないが、その名前がソクラテスの形相である靈魂を意味表示すると解するのなら、ソクラテスとソクラテスの本質は同一で

あるというものである。しかし、この解釈の難点はひとつには、Z4-6 は本質についてのロギコースな議論であり、形相への言及はなく、形相について「語られた」ということではないことがあげられる。さらに、「二重に意味表示すること」(1031b23)は「付帯的に語られるもの」例えば「白」や「芸術的」の場合には、「二重に意味表示することの故に、そのものとその本質が同一であると語ることは真ではない」と言われている。つまり、二重の意味表示は同一性を否定するものとしてここでは作用している。「白」のような付帯性は帰属する基体を必要とし、それを語ることは基体の白さという色と白いものを二重に意味表示することになる。「白」は「一方、人間であることそして白い人間であることとは同じではない」と言われる。(1031b27)つまり、白の基体となる人間や、もしそれがあるとして、白い人間の本質の説明言表は白と同一のものを意味表示することはないので、同一ではありえない。「他方、様態においては」つまり、二重に意味表示される白い人間と白は白という様態においては「同一」であるとされるが、これは「付帯的同一」(1031b19)のことであり、ソクラテスの靈魂のような実体の話ではない。Z6において、他の章の二重の意味表示を持ち込むことは正当ではないし、何よりも持ち込んだところで「語られた」ということにはならない。従って、この結論はこの章のなかで論じられたことから「いかなる仕方」で同一であり、また同一でないかを確定すべきである。Ross, *Aristotle's Metaphysics II*, p.179, Frede&Patzig, *ibid.*, S.113, Bostock, *ibid.*, p.115.

また、これは「自体的に語られかつ第一のもの」ということでソクラテスのような合成体・個体が理解されているかをめぐる議論とかかわる。Ross や Bostock は合成体ソクラテスとその本質は異なると解するが、Owen や Woods は合成体ソクラテスとその本質は同一であるという見解に立つ。(cf. Bostock, *ibid.*, p.115) Bostock 自身『範疇論』で第一実体とされるソクラテスが自体的に語られそして第一のものである可能性を指摘している。(p.115) 私はここでは Z 11 のように「いかなるものども」(1037b1) についてはなく、「いかなる仕方」で同一であるかが問われていることに注目したい。ロギコースに論じられる Z 6 においては、絶縁か非絶縁かということが、同一性と異他性の基準であると解する。この章においては、「第一のもの」の可能な例としてアイデアが皮肉として挙げられるが、事例は問題ではない。何であれ第一のものは非絶縁的であるという仕方により同一なものとなると理解すべきである。

- (38) Frede & Patzig, *Aristoteles Metaphysik Z, Text Übersetzung und Kommentar I*, S.19, 1988.

また井上忠は「Z 巻の第 4 章以下で展開される本質論ないし(本質の説明式としての)定義論は、まさしく、この先言措定されるものとしての形相の論にほかならない」と述べる時、Z 4-6 においては形相と質料への言及が一切なされず、ロギコースに本質と定義の問題が論じられていることを無視している。(『哲学の現場』p.176, 1980, 勁草書房。拙稿「アリストテレスの本質主義」p 12 ff 参照)

彼は「重層する先言指定制明」[千葉注、質料と形相とその結合体が $\acute{\upsilon}\pi\omicron\kappa\epsilon\acute{\iota}\mu\epsilon\nu\omicron\nu$ (「基体」或るいは「先言指定制」(井上訳))であるとされていることを差す。(Z 3,1029b2-5, 井上 p.176 参照)の座標軸にそえ、主としてそれだけをかれ自身が「先言指定制」と呼んだのは、日常言語の〈述べ〉と指示とにもっとも密着して現場了解される先言指定制、すなわち個体実体そのものを指定制する先言指定制であった。それが〈掴み〉の言語たる「本質」である」と述べる。(前掲書 p.68) また彼は「他のもの〈について〉の〈述べ〉ではない言葉は、直ちに個々の事実個体を〈掴む〉言葉であった。それがアリストテレスのいわゆる「本質」(「このものがあるとは何であったか」)を明らかにし「このものがあるということとはこういうことだったか」と納得させる言葉なのである。・・「本質」は「ある〈これ〉を成立させているもの」であった」(p.328)と述べる。彼は本質について個体実体そのものを「指定制」するものであり、「成立させる」ものであると使役的に述べ、因果論的構造のなかで本質を理解している。(同掲書 p.68, p.204, cf. p.328)

付記 本稿の early versions は北大哲学研究会(1997年10月21日)、三田哲学会(1997年10月25日)、東京大学「対話と論理」研究会(科研：代表天野正幸)(1997年12月6日)、北大古典研究会(1998年5月27日)、日本西洋古典学会(1998年5月31日)において読まれた。天野正幸、安西真、今井知正、牛田徳子、大江晁、岡部勉、荻野弘之、金山弥平、河谷淳、神崎繁、Richard Sorabji、高橋久一郎、田中亨英、田中利光、David Charles、中川純男、中畑正志、納富信留、Lesly Brown、堀江聡、松永雄二、山田友幸、山本巍、渡辺邦夫諸氏との議論から裨益するところ多く、記して謝意を表したい。

Non-causal Interpretation of Aristotle's Τὸ τί ἦν εἶναι (Essence)

Kei Chiba

I offer an interpretation of the origin of how and why the phrase τὸ τί ἦν εἶναι (hereafter essence) is employed, by giving an account of the context in which essence is introduced and its linguistic structure. In “The *Topics*” Aristotle develops a method by means of which one can formally examine whether any proposed proposition is well said or not. This method of establishing and rejecting any proposition is developed as Topos theory. Topos is the locution of argument or the point at issue on the basis of which a questioner examines a proposition proposed by the counter part of dialogue i. e. an answerer.

Aristotle must have thought that Socratic dialectic is *ad hoc* as a method in the sense that his inquiry into definition by examining an other's thesis always comes to a dead-end. Aristotle criticizes Socratic dialogue as follows; “it was natural that Socrates should be seeking the essence, • • there was yet none of the dialectical power which enables people even without the “what is it?” to speculate about contraries”. (1078b23-26) I take it that Aristotle strengthens dialectic by creating a system of inquiry into “what is it?” and to deal with contraries without directly asking the question “what is it?”. Dialectic argument must not raise the problem by asking the question “what is it?”, but raise it like “Whether is two-footed terrestrial animal the definition of man or not?” so as to be answered by just saying “yes or no”. (101b32, 158a16)

The main ingredients of Topos theory are four predicables (defini-

tion, unique property, genus and accident) of which every proposition or question is composed. Predicables are the ways of predicate's belonging to its subject. While "definition is a phrase which signifies essence", "unique property is what does not refer essence for some subject but belongs only to it and counterpredicates with it." (101b38, 102a18) In this way, any proposed proposition is classified into one of these four predicables. Since these four predicables are exclusive of one another, the reference of essence is fixed with respect to with other three predicables and introduced as a technical phrase in the introduction of predicables. One common feature among these is that "all these are definitory". (102b34) Even accident is alleged to be regarded as "definitory", because nothing prevents it from temporarily "becoming unique property", a kind of identity which is the necessary condition for definition. (102b21f, cf. 102a7-10) I claim that these four predicables are proposed to deal with possible answers of the Socratic question "What is it?".

An important characteristic in the Socratic practice of inquiring into definition is that he rejects the kind of answers which are given by examples and asks again the object itself. For example, Socrates asks "what do you think knowledge is?". Theaetetus answers by giving examples of knowledge such as geometry. Socrates responds to this by saying "We put the question, not because we wanted to count them, but because we wanted to know what, exactly, knowledge itself is." (*Theae.*, 146c-e, cf. *Euth.*, 6d, *Laches*, 190e) This shows that the question "What is it?" in the Greek language can be answered by being given an example and also by an object itself. I claim that τὸ τί ἦν εἶναι is coined by Aristotle to convey the object itself so as to avoid confusions which took place between Socrates who has only one way of asking i. e. "τί ἐστίν;" and the answerer.

If this interpretation is right, the linguistic structure of essence will

be made clear. I will just focus on the reason why the imperfect ἦν is employed. Goodwin writes in his *Syntax of the Moods and Tenses of The Greek Verb* that “The imperfect ἦν may express a fact which is just recognized as such by the speaker or writer, having previously been denied, overlooked, or not understood.”(13) I call this use of ἦν “dialectical imperfect”. This use accords very well with the dialectical situation where the question of the thing itself is asked afresh: When an example is given as an answer, the questioner, recognizing what is overlooked and misunderstood, asks again what the thing itself is.

Thus, Aristotle develops the method of dialectic as Topos theory on the basis of predicables. The normativeness of Topos theory is gained from the normativeness of the current language in the Academy. Division theory on the basis of inductive method is its main current language. Essence is signified by the definition composed of genus and its difference. Essence is properly λογικῶς discussed. Λογικῶς is the method of linguistic inquiry from the view point of “how to express” which can claim an assertion of being on the basis of necessity of argument. Essence is λογικῶς characterized as “to be the very thing what is” which may be tautologous but claims a mode of being i. e. the object itself. (141a35, cf. 73b8, 1030a3) In this way, essence is introduced in the dialectical context to express what Socrates sought for in his inquiry into definition.